恵那市ふるさと学習読本 vol.6

三好学先生の生き方・考え方

日本の近代植物学の開祖
自然保護の先駆者

三宅勝義＝編著

ふるさと人物編
Great Personalities of Our Hometown
3

恵那市
公式キャラクター
「エーナ」

恵那市教育委員会

恵那市ふるさと学習読本

日本の近代植物学の開祖
自然保護の先駆者

三好学先生の生き方・考え方

三宅勝義＝編著
恵那市教育委員会

ふるさと人物編
Great Personalities of Our Hometown
3

写真で見る 三好（みよし） 学（まなぶ） 博士

三好学博士（東京大学教授時代）

三好とよ：三好学の母

小林制（こばやしただす）：三好学の叔父

土岐（とき）小学校の首席訓導（しゅせきくんどう）・校長時代の三好学

三好家屋敷跡：この小道の奥の右手

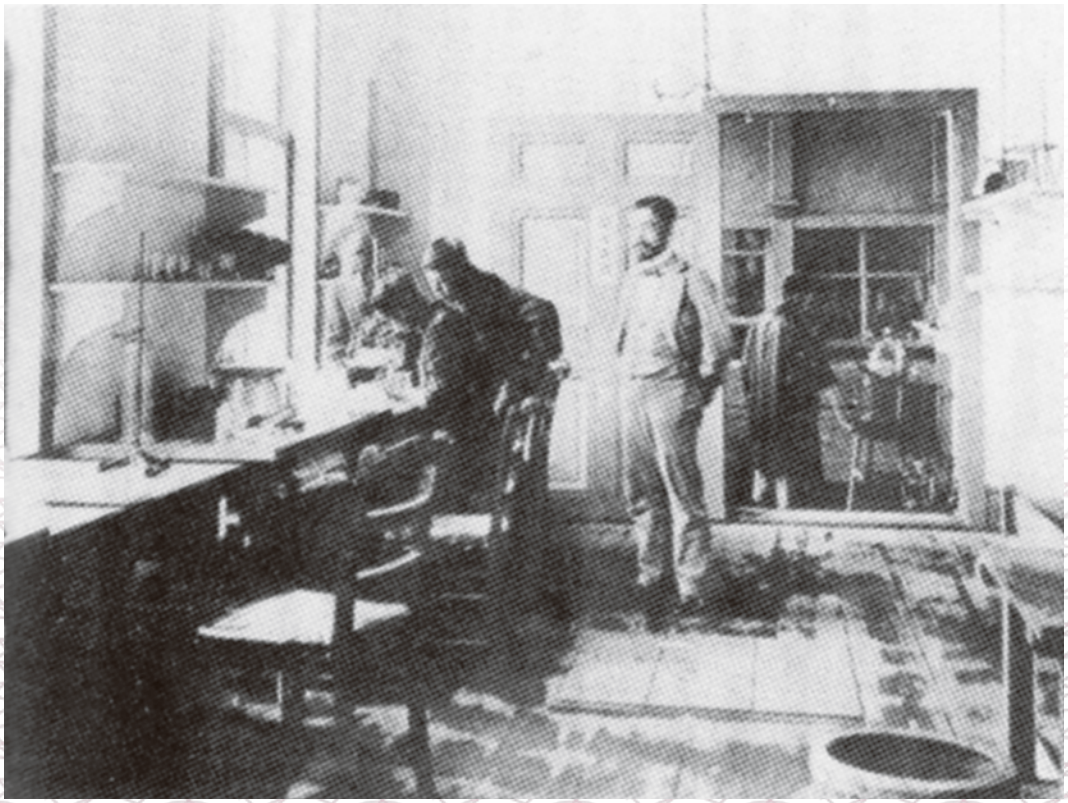
三好直吉（なおきち）：三好学の弟（向かって左）

三好源吉（げんきち）：三好学の弟

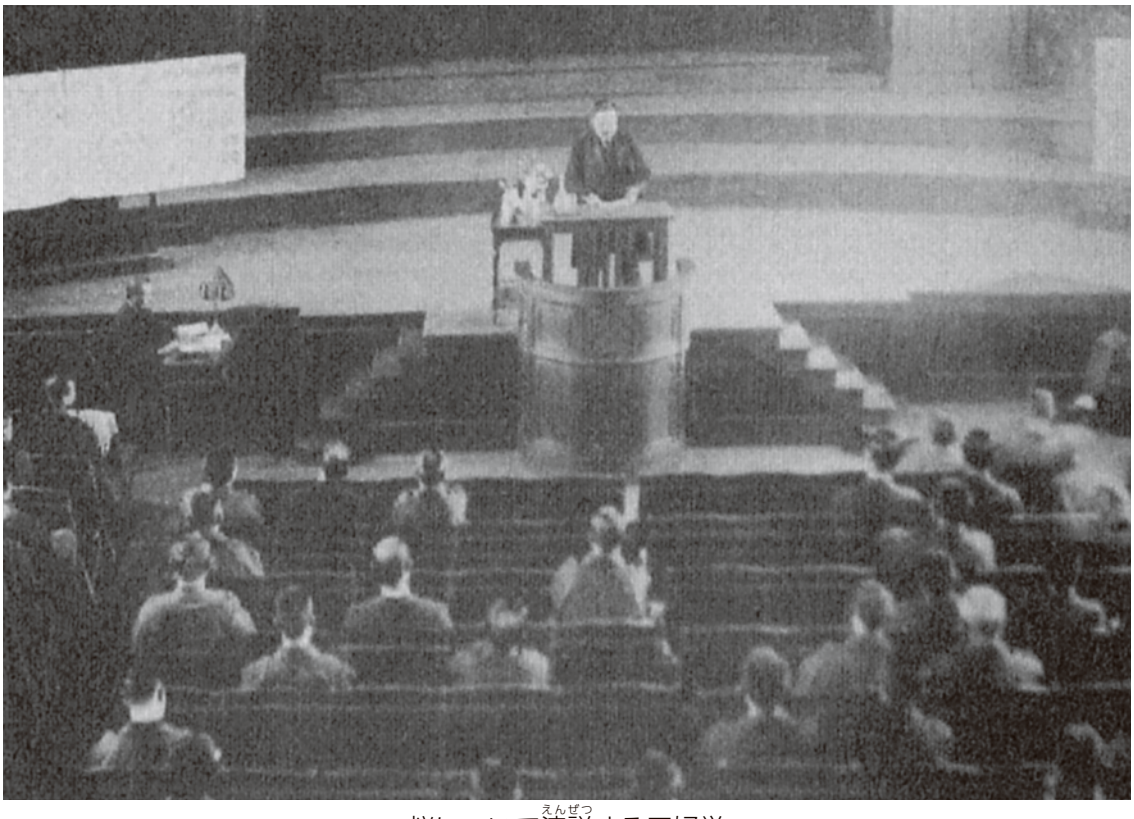
東京大学大学院時代の三好学（最前列一番右端）

ドイツから帰国直後の三好学

東京大学教授就任後初めての卒業式
（後ろから 2 列目、右から 3 人目が三好学）
明治 28 年（1895 年）



東京大学植物学教室の中の様子　明治 30 年（1897 年）



桜について演説する三好学

三好学が教授を退官する前々日に撮影　門下生たちと（左から４人目）

日本植物学会創立 50 周年記念大会における記念写真
昭和 7 年（1932 年）4 月 2 日

子どもや孫に囲まれた三好学夫妻　昭和 13 年（1938 年）ごろ

三好学の名誉教授時代：研究室にて

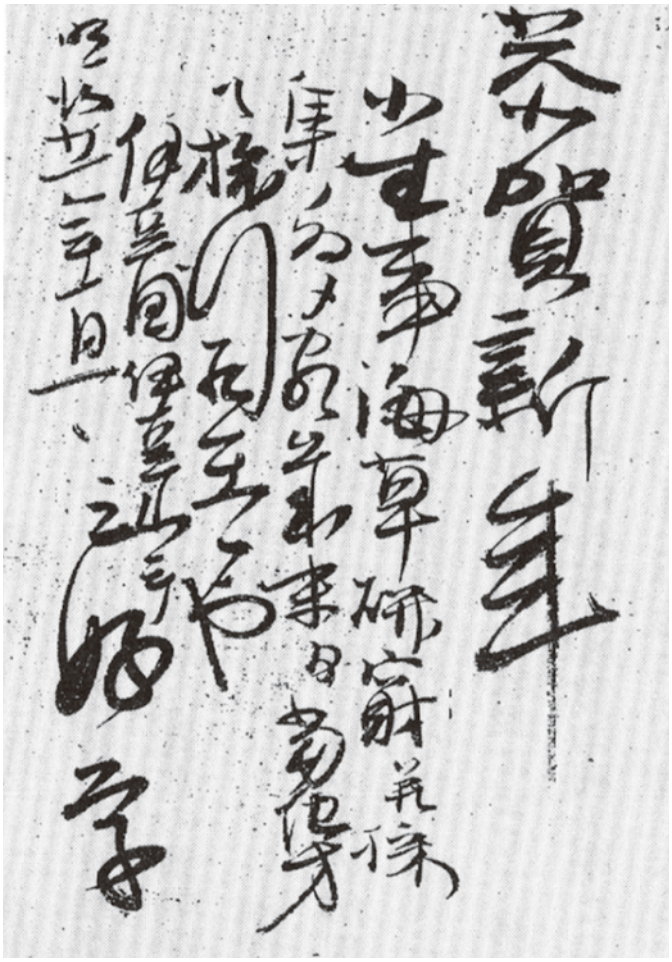
三好学夫妻

晩年の三好学

三好学の子女たち

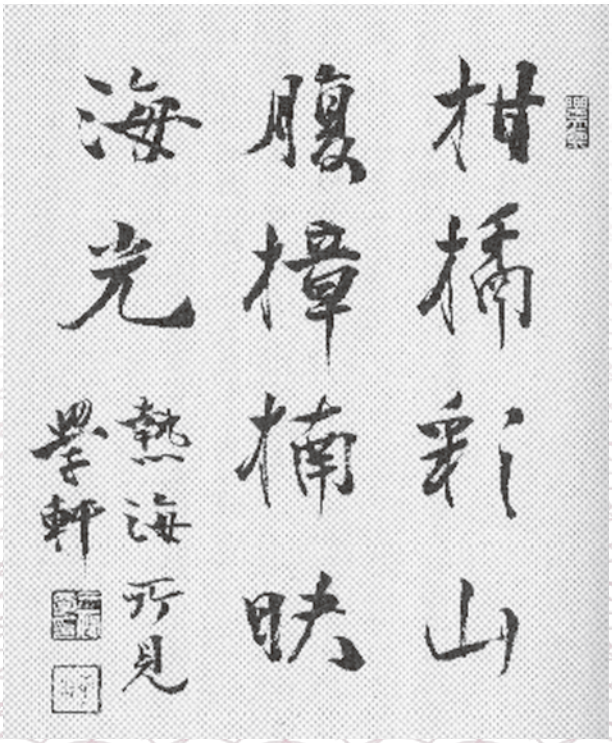
東京多摩霊園にある三好家の墓地

三好学博士の書と書籍（しょせき）

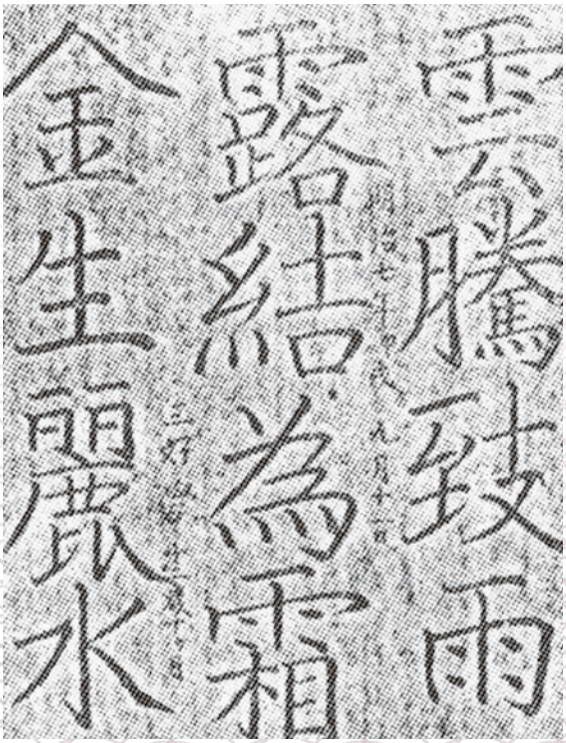


三好学自筆の年賀状

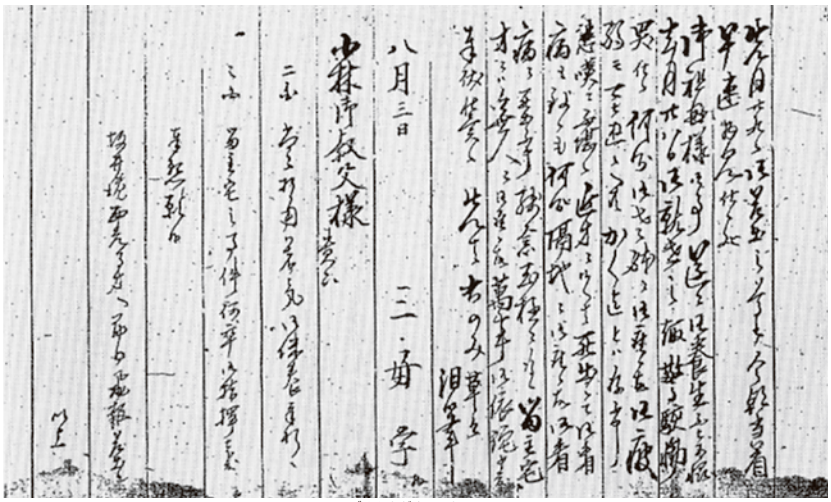
自筆の名前



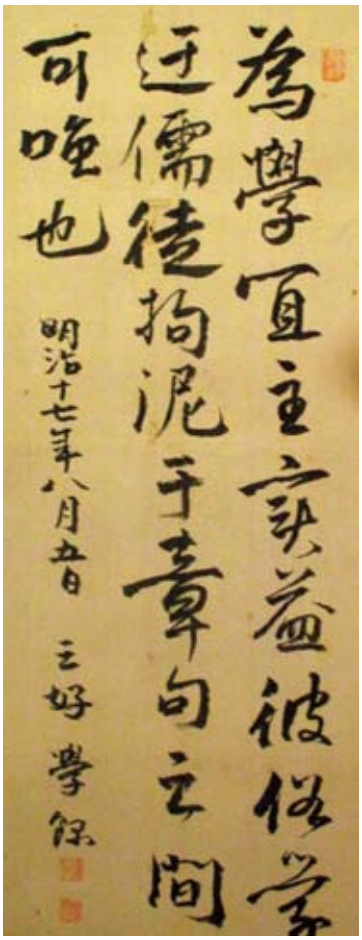
三好学晩年の書



三好学 12 歳の時の書



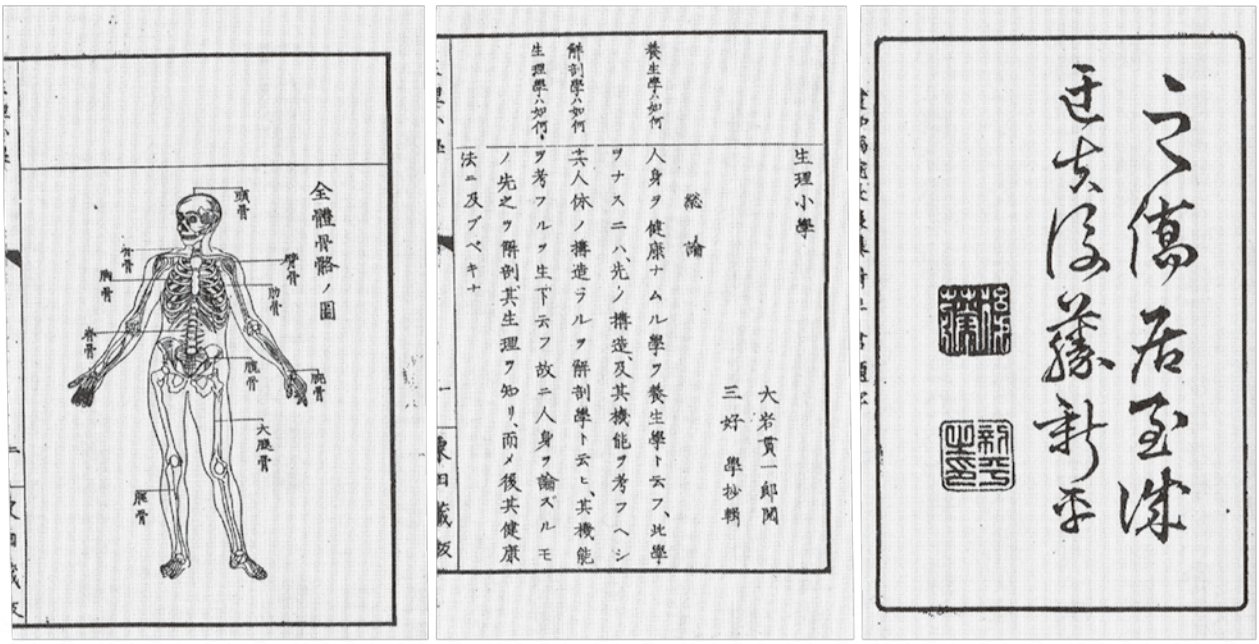
叔父の小林制に宛てた手紙



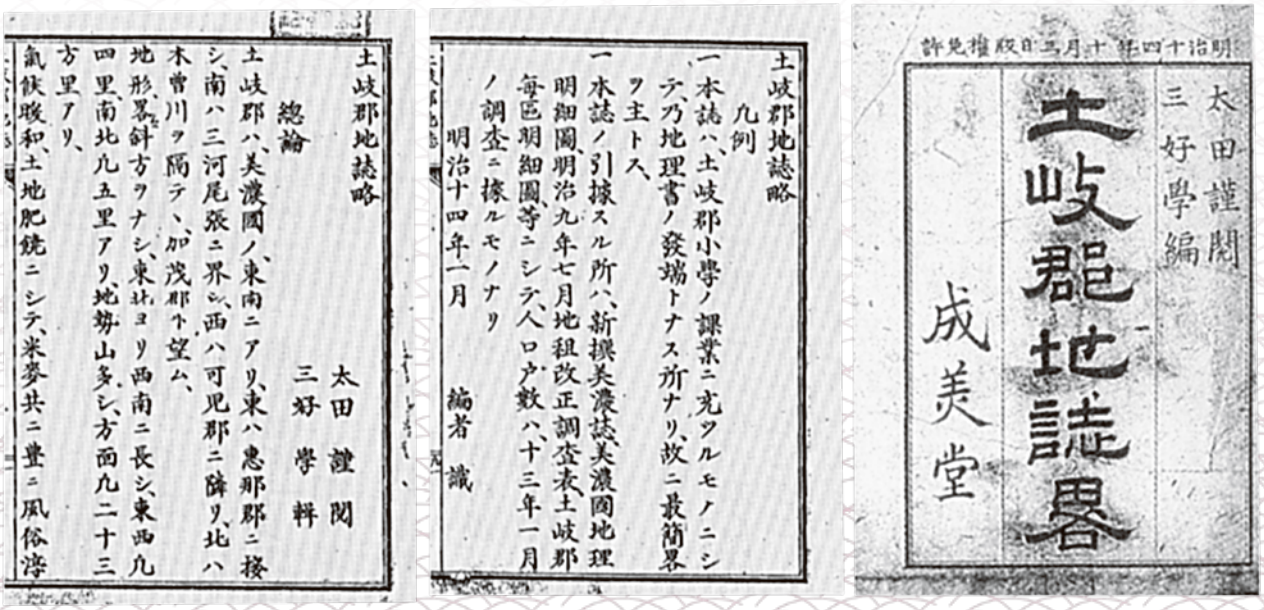
書（岩村歴史資料館蔵）

六曲屏風（個人蔵）

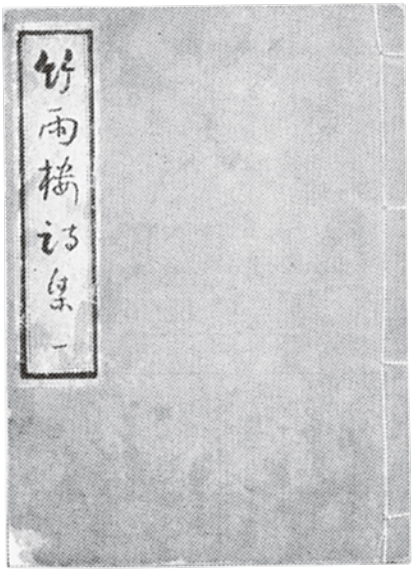
『授業日誌』：三好学が土岐小学校の首席訓導時代にまとめた授業記録



『生理小学』：三好学が土岐小学校時代にまとめた教科書



『土岐郡地誌略』：三好学が土岐小学校時代にまとめた郷土に関わる教科書



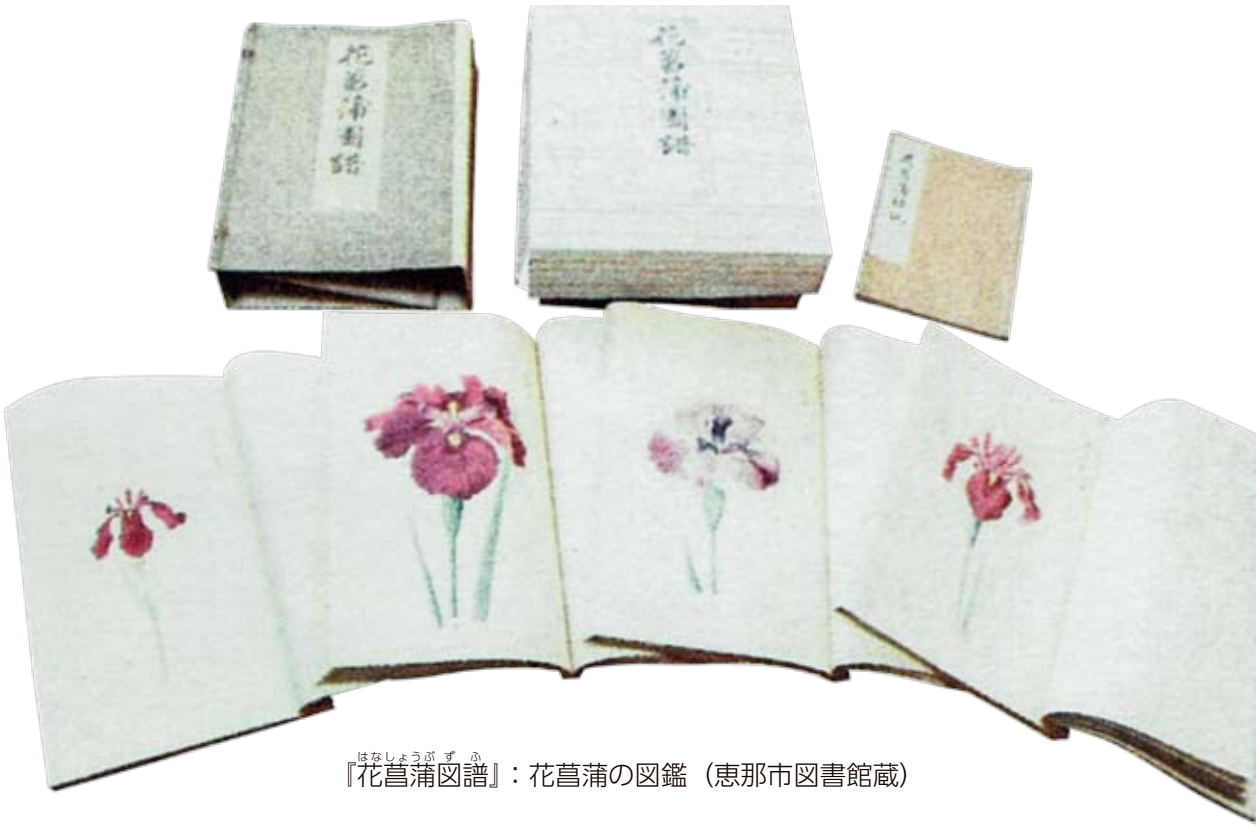
『竹雨桜詩集』：三好学自作の詩を集めたもの

三好学の著作の一部（岩村歴史資料館蔵）

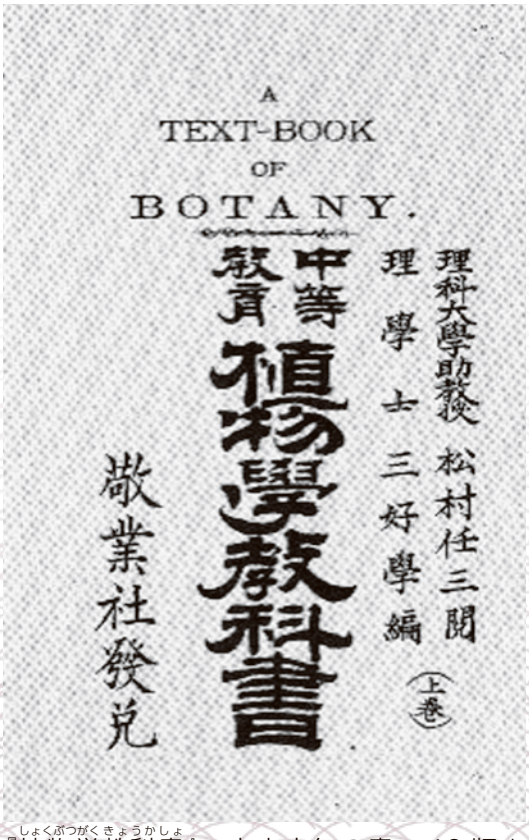
『櫻花図譜』と『櫻花概説』：桜の図鑑（恵那市図書館蔵）

日本の桜の紹介本（三好学博士著：英語版）

『日本植物景観』（岩村歴史資料館蔵）



『花菖蒲図譜』：花菖蒲の図鑑（恵那市図書館蔵）



『植物学教科書』：大変人気の書で 13 版まで増版された。

「櫻の会」の機関誌『櫻』第 1 号の表紙と目次：三好学の記事が 13 ページにわたって書かれている。

日本の近代植物学の開祖
自然保護の先駆者

三好学先生の生き方・考え方

目次

グラビア 写真で見る三好学博士 3

グラビア 三好学博士の書と書籍(しょせき) 11

第一章 三好学博士の功績(こうせき) 23

Ⅰ 桜の博士

Ⅱ 日本の近代植物学(きんだいしょくぶつがく)のパイオニア

Ⅲ 自然保護(しぜんほご)の先駆者(せんくしゃ)

Ⅳ 情熱的(じょうねつてき)な教育者、優秀(ゆうしゅう)な作家

第二章　三好学博士小伝

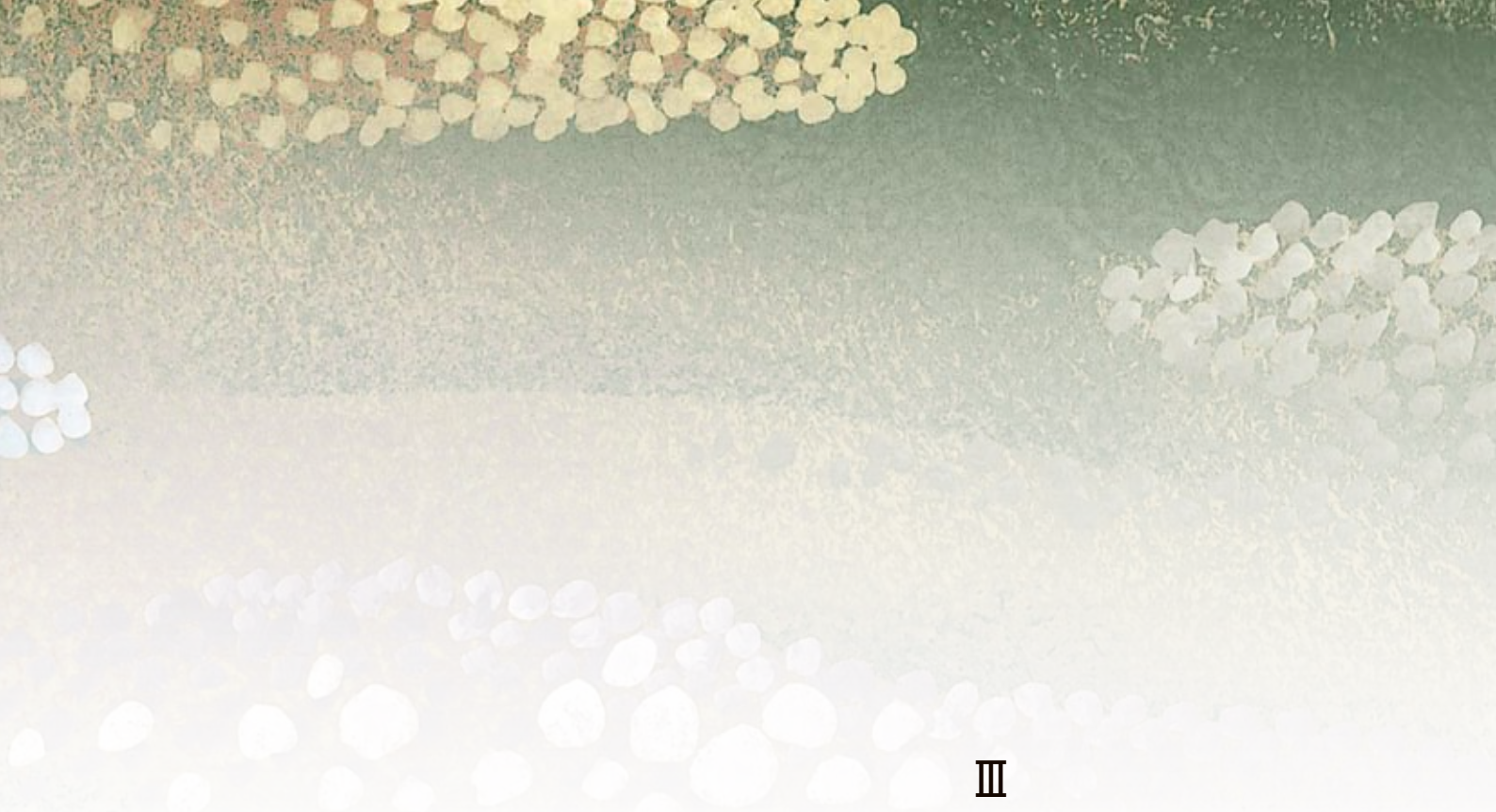
34

Ⅰ　少年時代

江戸から岩村へ
文教の岩村藩
父ゆずりの文学少年
岩村藩消滅と父の死
三国港と福井での生活
小学校の教師を目指して
祖母の死
白山登山
師範学校卒業
岩村に帰る

Ⅱ　教師時代

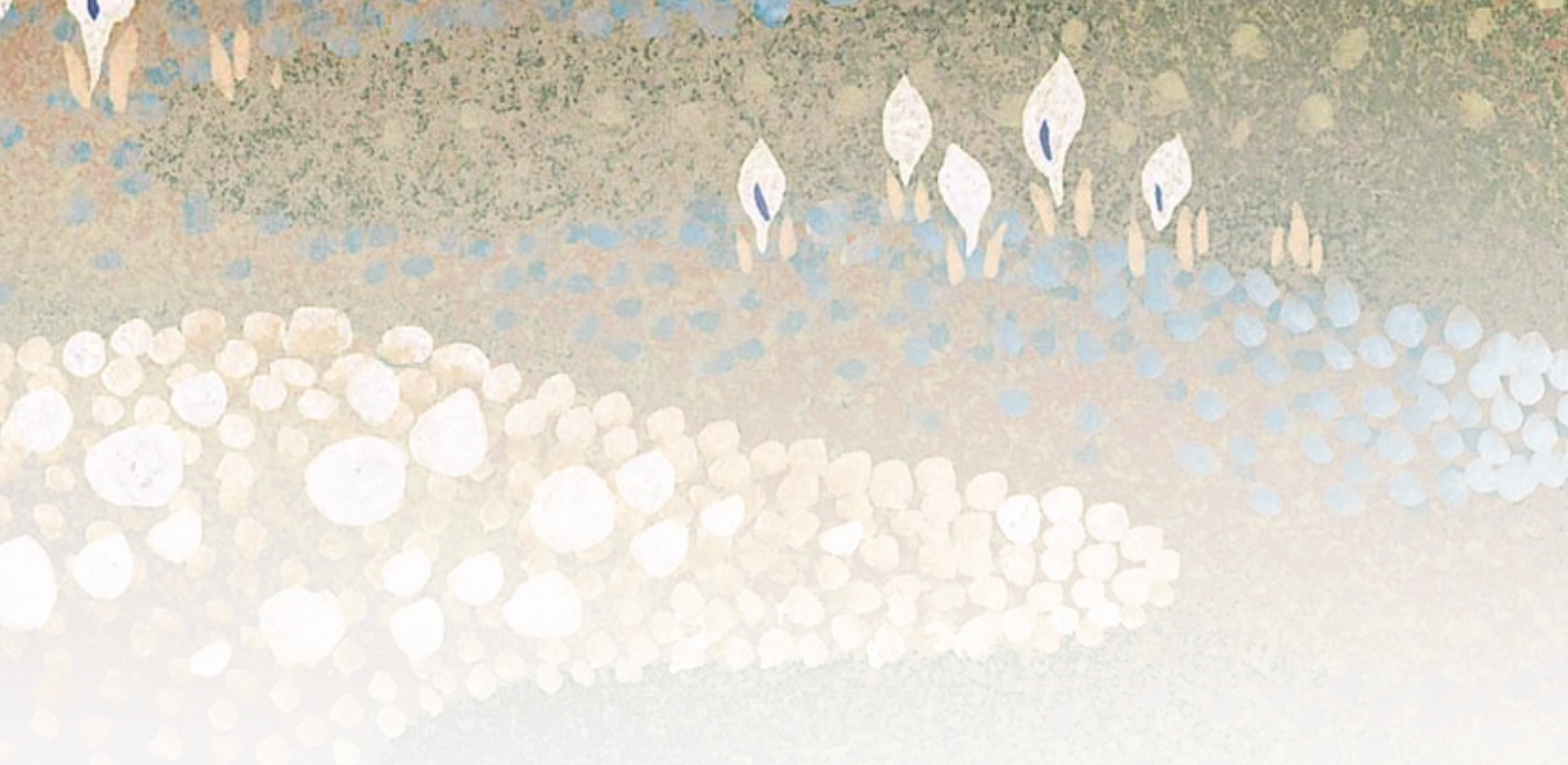
土岐学校の校長（首席訓導）として
土岐小学校での教育
『授業日誌』の作成



小学校教科書の編さん
村瀬太乙に師事
東京大学予備門をめざす
土岐小学校を辞職し上京

Ⅲ　予備門・大学生時代

入試に向けての勉強
予備門の入学試験と学業
矢田部良吉教授との出会い
文学から理学へ
日光での植物採集
東京大学理学部生物学科
大学での植物採集旅行
理科大学動植物科に再入学、そして卒業
このころの家族の様子



Ⅳ 大学院生時代

東京英和学校の講師となる
郷里、岩邑小学校での講演
生涯の転機―ドイツへの留学
軍人・大島健一との出会い

Ⅴ 大学教授・名誉教授時代

理科大学教授に就任
結婚、新進気鋭の教授として
生態学・植物変異の研究・自然保護への始動
野口英世博士との出会い
「櫻の会」の発足と機関誌『櫻』の発刊
土岐尋常小学校へ桜を贈る
アインシュタイン博士の接待
天然記念物保護にかけた後半生
三好学博士の終焉

第三章　偉業を支えた力

89

Ⅰ　克明な記録力
Ⅱ　たぐいまれな向上心
Ⅲ　より高い志
Ⅳ　あくなき探究心
Ⅴ　卓越した語学力
Ⅵ　空論より実学
Ⅶ　勤勉で温和で親孝行
Ⅷ　義理堅く人情深い
Ⅸ　牧野富太郎博士の追悼文

資料

自然はなぜ破壊されるのか　101

Ⅰ　日本の風景が壊されている
Ⅱ　破壊の原因①　価値を知らない
Ⅲ　破壊の原因②　たくさん採集し、商品化する
Ⅳ　破壊の原因③　開拓や建設工事
Ⅴ　破壊の原因④　工業の進歩
Ⅵ　破壊の原因⑤　火災
Ⅶ　ふるさとを守ることの大切さ

三好学博士生誕百五十年記念事業
故郷恵那の桜
三好学博士の故郷・岩村
あとがき

三好学博士略年譜
主な参考文献

第一章　三好学博士の功績

Ⅰ　桜の博士

三好学博士の功績の中で真っ先にあげられるのが、桜と花しょうぶの研究です。特に桜についての研究は、数々の文献を調べたり、日本各地に調査に出かけたりして、桜の分布や品種の分類、変異の研究などさまざまな角度から熱心な研究をしました。その研究の足跡は今でも多く残っています。例えば、富士見桜は学名「ブルーヌス・セルラータ・リンドル・エフ・ベヌスタ・ミヨシ」といいます。学名にミヨシとつきます。ほかにも三好学博士の名前がつく桜の数は百種を超えるといいます。このように博士が発見・研究したことを示す証が今でも残っていて、博士の功績の大きさがうかがえます。

また、「櫻の会」などを創立し、桜の保存や普及について組織的な活動の発足にも力を注ぎました。「櫻の会」の機関誌『櫻』も発刊し、数多くの寄稿もしています。

博士が五十八歳の時（大正九年）にまとめた『櫻花図譜』というものがあります。これは、博士がそれまで調査・研究して描いた百種類以上の桜が紹介された『桜の図鑑』です。この図鑑には、日本の主な桜がていねいに細かく描かれているだけでなく、解説

書もついています。博士は、この本を出版した理由を、この図鑑の「あとがき」で次のように説明しています。

「昔から桜の品種を精巧に描き出した人は少なく、原画があるだけで、写本や印刷はない。しかもその原画は、一部の人が秘蔵しており簡単には見せてくれないから、桜の品種を知ろうと思っても、実際には、どこにも図録がないのが実情である。だから、私は、桜を知りたい人、桜に興味のある人、研究をしたい人に役立つようにこの本をだしたのだ。」

博士の研究は、自分やごく限られた専門家だけのものではなく、世の中の人々のためという博士の基本的な研究姿勢がうかがえるお話です。

そんな博士が桜に興味をもったのは幼児のころからです。三好家は熊洞（現恵那市岩村町五区、新屋敷）にありました。その当時の思い出について次のような記述が残されています。

「私の幼年のころは、岩村藩の城下町の岩村にいました。この屋敷は明治維新の時、江戸から引っ越してきて、旧藩主から頂いたものです。城山のふもとの熊洞という寂しい谷間にありました。門の外にかかっている土橋を渡って山の中に入ると山桜が生えていて、花の咲くときにはよく遊びに行きました。小さいときのことなのではっきりとし

三好学博士の屋敷跡（岩村町５区　新屋敷　熊洞）

た記憶はありませんが、桜について最初に興味をもったのはこのころでした。」

博士が植物学を専攻するようになり、桜への興味が徐々に研究対象へと変化していきました。桜の持つ奥深い特性にますます虜になっていきました。

博士が初めて研究した桜は東京の荒川堤のものでした。明治三十六年（一九〇三年）の春に荒川土手を訪れ、立派な桜を目にしたのがきっかけでした。幼児のころから気にかけてきた桜が研究の対象として形になったのもこの荒川堤の桜でした。以後、全国各地へ出かけて行き、精力的に研究をしました。

「日本の桜の発生が日本の国と人と同時であって、国民性とじっくりあった尊い植物であることを知ってから、特に桜の研究に没頭していますが、研究すれば研究するほどますます複雑になります。だから、桜について一生研究するつもりです。」

とよく人に語っていたといわれます。

また、博士の著書『植物生態美観』の中で、桜の由来を伝えるために次の歌を引用しています。

いにしへの　奈良の都の　八重桜
けふ九重に　にほひぬるかな　　伊勢大輔

遠く奈良の時代からも日本人に愛され、歌にもなっている桜が、博士にとってはたまらなく好きだったと思われます。博士は文学にも造詣が深く、こうした歌にも詠まれる桜に対して文学的なロマンも感じていたかもしれません。

このように、桜に対して格別な関心とその熱意ある研究姿勢から、人々は三好博士のことを「桜の博士」と呼びました。

Ⅱ　日本の近代植物学のパイオニア

三好学博士は、明治時代にドイツに留学して日本に近代植物学をもたらし、その基礎を築きました。

植物学というのはもともと薬草を探すことから始まった学問です。中国では「本草学」といって、六世紀ごろに、野山の草木の中から薬になるものを集めて、薬草として分類して記録・整理したのが始まりだといわれています。この「本草学」が奈良時代に日本に伝わって以来、日本の植物学も「本草学」として発展してきました。

明治時代になってもそれは同じで、当時の植物学研究は、いろいろなところから植物を採集してきて、その植物がどんな種類の植物か明らかにして、分類し、記録する分類

学でした。明治十年（一八七七年）東京大学に理学部が創られ、生物学科ができたときも、そこで研究したのは植物の分類学でした。数年後、アメリカから帰国した矢田部良吉博士が一般植物学を大学で講義するようになって初めて、植物学が系統だった学問になったのです。三好学博士が植物学の道を歩みはじめたのはそのような時代のことでした。

しかし、ドイツではすでに、植物そのものを科学的に研究する植物生理学やその植物が自然の中でどのように関わり合いながら生息しているかを研究する植物生態学が始まっていました。植物学が分類する学問から科学的に研究する学問へと大きく変わっていたのです。

博士は、この進んだドイツの近代植物学を日本にもたらしたのです。留学先のドイツから実験器具や機械、参考書や資料を持ち帰り、自分自身でも研究をし、学生たちにも教えました。明治、大正時代以降のほとんどの日本の植物生理学者、植物生態学者が三好博士の弟子だといわれますから、「日本の近代植物学研究の開祖」といっても言い過ぎではありません。

ちなみに、今では普通に使われる「生態学」や「景観」といった言葉を最初に使った

のも三好学博士でした。

また、人間も自然界の一部である以上、人間の営みと植物の関係をしっかり研究しなければならないと「人生植物学」も提唱しました。

Ⅲ　自然保護の先駆者

三好博士と同じ時代に東京大学の地質学教室にいた岐阜県出身の脇水鉄五郎博士は、「三好博士がわが国に残された功績の最も大きなものは、天然記念物の研究並びに保存の事業です。三好博士は実に日本の天然記念物保護事業の率先者であり、指導の第一人者でした。晩年は、特にこの分野に力を入れられていました。」と三好博士の天然記念物保護に対する努力を高く評価しています。

明治維新以降、日本には近代化の波がおしよせてきました。国中が「文明開化」と「殖産興業」にわきたちました。しかし、その一方で、各地で自然が急速に破壊されていき、昔からある名木や名勝・旧跡がどんどんなくなっていきました。近代文明がもたらす便利さ・快適さの裏で、自然が壊されていったのです。

植物学者として日本のそのような状況を博士はとても心配していました。そして、明

治三十九年に『東洋学芸雑誌』という雑誌に「名木の伐滅ならびにその保存の必要」という論文を発表しました。そして、いろいろな雑誌や新聞で、天然記念物保存の大切さを訴えました。

『天然記念物』という冊子には次のような考えを載せました。

「日本は気候が良く、雨が多く、土地が肥え、草木の発生が盛んで山水の景色に富み、また、動物、植物、鉱物の種類も多いことで世界でも名高い国です。

このような日本固有の天然物は大昔から伝わってきたもので、昔はいたるところに天然に生えた林、美しい原野、珍しい石、清い流れなどが見られましたが、世の中が開けるにしたがって、様子が変わってきて、森林は破壊され、原野は開墾され、岩石は壊され、清い流れはなくなり、そのあとに町や田畑や工場などができました。

江戸時代には、各地に樹林原野がありましたが、今では、狭い土地も利用されて、天然林、天然原野は、日に日に消滅していきます。もしこのまま破壊が進んだら、わが国固有の天然物やいい風景もついには見られなくなるかもしれません。

天然物が壊されていくのはいろいろ原因があります。天然の原因であれば仕方がありませんが、人間の行為によって起こることは、適当な方法で制限しなければなりません。」

と自然破壊の危惧と天然記念物の保存の必要性を訴えました。

博士は、冊子等に寄稿するだけでなく、日本各地の名木や名勝・旧跡の調査を行い、海外の進んだ事例を研究するなど、自分の足で各地にでかけ精力的に活動しました。

また、民間の心ある人を動かして、政府にも働きかけをしました。

このような博士の努力は、大正八年（一九一九年）に「※史跡名勝天然紀念物保存法」として実を結びました。この法律は、現在の「文化財保護法」や「自然環境保全法」の先駆けとなるものです。

法律の公布と同時に、博士は史跡調査をして歩くなど精力的な活動を続けました。博士が亡くなる三年前の昭和十一年（一九三六年）には、史跡六百九十一件、名勝九十三件、天然記念物五百六十六件が国指定となり、そのうち四百三十件が植物関係だったといいますから、博士の活動がいかに精力的だったかわかります。

大正十五年（一九二六年）に東京で第三回汎太平洋学術会議が行われた時には、三好博士は当時指定された天然記念物の説明を外国人に流ちょうな英語で行いました。日本の天然記念物の保存事業を世界に紹介したのです。おそらく日本も自然保護についてもやっと先進国の仲間に入れたという誇りを胸に話をしたことでしょう。

※現在は天然記念物と表記しますが、その当時は天然紀念物と表記しました。（記→紀）

「環境があってそこに人間が存在する。」この言葉は環境破壊が進んでいる今の時代によく言われるようになったように思えますが、そうではなく、これは三好博士がその著『日本天然紀念物解説』の中で、すでに九十年前に言っていることです。博士は幼い時から風光明媚な岩村で過ごし、また師範学校を出てから多感な三年間を美しい山野で囲まれた東濃地方で過ごしました。このことが、自然界に対して大きな愛情を持たせることになったのではないでしょうか。

晩年、博士は、老体にも関わらず、全国各地に調査に出向き、北は北海道から南は沖縄まで、四百以上の植物および植物群落を天然記念物に指定し、学術研究の資料として後世に残しました。

Ⅳ 情熱的な教育者・優秀な作家

三好博士は、植物学者として有名ですが、多くの後継者を育てた教育者でもあります。

博士は、後継者（門下生）の教育にも力を注ぎ、彼から教えを受けた優秀な人材は、やがて次々と創設された大学や高等学校の植物学教師となりました。さらに、彼らから教えを受けた後輩たちが、広範囲にわたって研究をし、その基礎を作っていきました。

そして、第二次世界大戦以後、日本は目覚ましい発展を遂げ、世界の科学技術をリードするようになりました。

多くの後継者を育てた三好博士ですが、これは単なる研究者だけではできないことです。

三好博士は、十代後半、小学校において訓導（旧制小学校の正規の教員）の経験をしており、その経験が大学の研究者になっても、後継者を育てる大きな力となったのです。

小学校の訓導であった期間は、わずか三年ほどでしたが、その間に『授業日誌』と題した教育記録を残しています。これは、後になって、当時の教育事情を知るうえで、貴重な資料となりました。また、日々教育に携わりながら、教科書も執筆しており、教育にも情熱をもっていました。

そうした三好博士の教育者としての資質と功績が認められて、当時の文部省より十七回も教育検定委員を委嘱され、教員の資質向上に尽力しました。

三好博士は、「私の著作物を重ねると私の身長を越える。」と言っていました。十代後半に書いた『授業日誌』も分厚い大作です。

博士には、人並はずれた文才がありました。これは、多くの蔵書を持っていた読書家

の父の影響も大きかったと思われます。また、博士が幼少のころ育った岩村藩は古くから学問に力を入れており、知新館という藩校もあり、子供から大人まで、勉学に熱心なところでした。江戸時代の儒学者佐藤一斎（現在の東京大学の学長になった人）のゆかりのある地でもあり学問を身に付けるというよい環境がありました。そういう環境が自然と博士を学問の道へと導いたのかもしれません。

三好博士も、途中で進路変更をしましたが、最初は、将来、文学で身を立てようと思っていました。記録によれば、博士はすでに十歳ころから漢詩を作り、英語を学んでいます。こうして、幼少のころから文才の基礎を培ってきたと思われます。

博士の著作の中には、何回も版を重ねて出版されたものがあります。それは、内容はもとより、その書きぶりが分かりやすく、流ちょうであったからです。

三好博士の数々の功績は、根底に情熱的な教育者としての資質と優秀な作家としての才能、そして人並みはずれた努力があったからです。

第二章　三好学博士小伝

※この三好学博士小伝のコーナーは、伝記の表現上「三好学博士」の敬称を略して「学」という名前で記述しました。他の人物も敬称を略しました。

Ⅰ　少年時代

江戸から岩村へ

学は、文久元年（一八六一年）十二月五日、父友衛と母とよの次男として生まれました。生まれた所は、美濃岩村藩の江戸藩邸（大名小路）です。父は藩主能登守松平乗命の御側用人で、百三十石取りの侍でした。この江戸藩邸は、現在の丸の内にあり、近くには数寄屋橋や鍛冶橋などなじみ深い名前も見られます。

学がこの藩邸で育ったころは、長州征伐など日本中が大揺れに揺れていた時代で、まもなく明治維新が始まり、三好家は混乱する江戸から藩主の所領の美濃岩村（現在の岐阜県恵那市岩村町）に引きあげることになります。岩村の三好家の屋敷は藩主からいただいたもので、今の岩村町熊洞にありました。

明治二年（一八六九年）に版籍奉還が行われると、それまでの岩村藩がなくなり、明

岩村藩江戸藩邸付近の略図。

治政府の下に岩村藩庁が置かれることになりました。藩主能登守は岩村藩の知事になりました。この新しい岩村藩庁で父友衛は軍事局に所属し、円機隊という部隊の司令に就任しています。

学の長兄は父友衛と先妻の間にできた安太郎（二歳で早世）で、学は後妻の母とよの第一子でしたが次男で、下に源吉、直吉の二人の弟がいます。

学という名前は今でこそ珍しくはありませんが、当時の名前としては、大変珍しいものでした。これは、三好家の跡取りとしての期待が込められていたものと思われます。

文教の岩村藩

元禄十五年（一七〇二年）、国替えにより小諸藩主から岩村藩主となった松平乗紀は、文教政策に力を入れ、城下に学問所を作りました。そして、儒学者の※佐藤周軒を招いて教育にあたらせました。

岩村藩は小さい藩でしたが親藩でした。幕府の中でも重要な地位にあり、明治維新までの約二百年間を松平一族がここを支配しました。

美濃国で最も早く文教が開けたのはこの岩村藩で、初めは「文武所」と言って文武両

※佐藤周軒
（1665年～1741年）
後藤松軒に学び、元禄15年（1702年）岩村藩校「知新館」の教授として招かれる。佐藤一斎は曾孫にあたる。

方を教えていましたが、後には知新館と名称を変えました。全国的に見てもこの藩校は古く、岩村藩より古いものは摂津有馬の造士館、米沢の興譲館ぐらいです。

学が生まれた文久二年（一八六二年）、徳川幕府は、日本最初の英和辞書を出版しました。公刊されたのはわずか二百部でしたが、岩村藩はいち早く手に入れ、藩校知新館で英語を教えたのです。

明治から昭和初期にかけて近代日本の基礎を築いた人たちの中に、女子教育の下田歌子、陸軍軍人の大島健一がいます。下田歌子は実践女子学園の創始者であり、大島健一は陸軍大臣を務めた人物です。この二人は、幕末の岩村で生まれました。そんな下田歌子や大島健一が、近代日本の歴史に名を残したのも、幼少時代にこの岩村藩の学問を大切にする雰囲気に触れていたからかもしれません。

学も十歳のころには、漢詩とともに、英語を習っていました。

父ゆずりの文学少年

岩村藩上級武士の家に生まれた学は、父から武士の子弟としてのたしなみや教養をしつけられました。十歳のころには、漢詩を作るだけの教養も身についていました。

学が使っていた英語の教科書。

知新館正門（岐阜県文化財：史跡に指定）
現在は藩主邸跡地にある。

『竹雨桜詩集』という自作の詩をまとめた詩集の中には、十歳前後に作った五つの漢詩が残っていますが、そこには四季がだんだん変わっていく様子が見事に歌いだされています。

学の、桜をはじめとする植物や自然への興味、観察力はこのころに培われたのかもしれません。

岩村藩消滅と父の死

明治四年（一八七一年）、廃藩置県が行われると岩村藩は岩村県になり、やがて岐阜県になっていきます。旧藩主は東京へ移り、旧藩士達も職を失い、その生活環境も大きく変わっていきます。つい数年前まで家格の高かった侍が、普通の人になってしまったのです。三好家の生活もずいぶんと不自由になりました。さらに、明治五年（一八七二年）十一月二十日、三好家の家族に悲劇が訪れます。それは家長の父友衛が病気（チフス）で突然亡くなってしまったのです。思いもかけぬことでした。

西光寺
福井県坂井市三国町南本町に境内を構える浄土宗の寺院。

三国港と福井での生活

チフスのため四十六歳の男盛りでこの世を去った父の後に残されたのは、十歳の学と四歳と二歳の幼子をかかえた母とよでした。

父亡き後、三好家の生活は苦しい日々が続きました。この状況をなんとか乗り越えなくてはならないということで、最年長の学を福井県坂井郡三国町にある西光寺に預けることになります。西光寺の中島性善住職が、母とよの兄、学にとって伯父に当たる人だったからです。

幼い学が母のもとを離れ三国の伯父のところへ行かなければならなくなりました。きっと寂しく辛いことだったにちがいありません。

学が預けられた西光寺は、三国の港から少し上がったところで、「昔は鐘楼から港がみえたらしい。」と西光寺の老師が話しておられたそうです。本堂は学が来た当初のものですが、現在は学に関する資料は何も残っていないそうです。

小学校の教師を目指して

父を亡くし伯父性善に引き取られた学は、一日も早く自立し、家族を養うことが最大

の願いでした。幸いにも、明治八年（一八七五年）小学校教員不足を解消するため、新たに設置された小学校授業法伝習所は、学にとってよい知らせでした。

この伝習所は、私費による通学生徒以外は、全員が寄宿舎に入らなければなりませんでした。学費や生活費の支払いが困難な者は、伝習所を卒業し小学校へ就職した時から毎月一定額を自分の給料から差し引かれました。自動的に返済する仕組みになっていました。また、これ以外に生徒には少額でしたが、月々学資金がもらえましたので、学にとっては住居と食事と学費がすべて解決されることになりました。かねてから望んでいた自立への道がここにひらけることになりました。

このようにして進むべき道が決まった学は、今までよりさらに勉学に励み、明治九年（一八七六年）三月、脩齊小学校上等一級を優秀な成績で卒業しました。

小学校卒業後、学は伝習所の入学試験に見事合格し、明治九年（一八七六年）四月無事入所することが出来ました。このときの福井伝習所の募集生徒は、本科八十名、予科三十名でした。福井伝習所は福井城の堀に面した元福井藩家老の旧邸にありました。

学は三年間お世話になった西光寺の人たちとも別れ、決められた身の回りのものを持ち、伯父につれられてこの寄宿舎に移りました。

龍翔小学校
脩齊学校の後の小学校。

日々の学業も大変でしたが、三ヶ月毎の小試験と、六ヶ月毎の進級試験はもっと大変でした。才能に恵まれた彼は、やがてこれらの難関を次々と克服していきました。しかし、この厳しい日課は真剣勝負で、さすがに秀才とよばれた学も好きな漢詩を詠む余裕はありませんでした。

明治十年（一八七七年）二月に伝習所がなくなり、新たに石川県第三師範学校が設置されました。学は自動的にそこに編入されました。

相変わらず厳しい勉学の毎日が続いていましたが、もともともちあわせていた学者としての才能が芽生えはじめ、厳しい学業もいつしか学問への興味へと変わっていきました。

学は、福井での三年間の学生生活の間は、まるで文学青年で、漢詩作りに没頭したり、校内の同人文芸誌の編集に熱をあげたりしていました。

次の詩は学が当時つくったもので、そのころの学の思いの一端を見ることができます。

書床感有り（明治十年）

霜風凜冽窓間を鑽る

深夜書を読み身未だ閑ならず

留寓すること五年恍として夢に似たり
何れの時か業就りて家山に返らん

明治十年（一九七七年）の冬をまじかにした晩秋、師範学校の宿舎でランプの灯をたよりに勉強にふけるとき、ふと思い出すのは岩村や母や弟への思いです。この詩には張りつめた学の思いが伝わってきます。

祖母の死

学の祖母きせは祖父五代目源太夫の後妻で、父友衛にとっては継母に当たり、小林家の婿養子になった※小林制の生母で、明治十年七月二十八日岩村で亡くなりました。

その時、学は福井町の石川県第三師範学校の寄宿舎におり、祖母の訃報は叔父が翌二十九日に送り、八月三日に学の手元に届きました。

学は、すぐに叔父へ手紙を出しました。それには祖母の死に対する深い悲しみと驚き、遠く離れたところでは看病もままならず悔いが残るなどの内容でした。

学の母とよは、夫亡き後も祖母きせに仕えその最期を看取りました。学も福井に来る

※小林制
三好学の父方の叔父、父友衛の弟。小林家に養子に入り、小林制を名乗る。
三好学が最も頼りにした人物。ことあるごとに手紙を送っている。

までは、祖母きせと同居しており、悲しみもひとしおでした。

白山登山

明治十年（一八七七年）八月六日から学は、石川県第三師範学校の教師と、友人の三名で白山へ登りました。この登山は、やがて彼の将来に大きな影響を与えました。

この白山は、古くは万葉集にも詠まれていますが、信仰の山として有名です。白山の最高峰である御前峰に祀られている白山奥宮とその本宮である石川県石川郡鶴来町の白山比咩神社は全国各地にある三千有余の白山神社の中心です。

白山山麓は、全国有数の豪雪地帯であり、十一月下旬より翌年四月中旬ごろまで積雪が消えません。そして、白山は、日本で最も南端に位置する高山帯を持つ山で、山頂には七、八ケ所の雪渓と十ケ所を超える花畑があります。そこに咲く高山植物の中には、南限を示す貴重なものが多く見られます。

また、白山には今でもブナ原生林が残っており、ここにはニホンカモシカ、ニホンザル、ツキノワグマなどの大型ほ乳類やイヌワシ等の多くの鳥類が生息しています。

学の白山登山は八月六日より八月十一日までの五泊六日の長旅でした。学は、一日目

よりマラリアの再発で体調を崩していました。登山の行程が一二一・一キロメートルという極めて厳しい登山でしたが、見事に最後までやりきりました。その学の体力と気力には感心します。登山の時期はちょうど花畑が真っ盛りの時期であり、多くの高山植物を観察することができ、大自然の美と生命力に新たな感動を覚えました。それから八年を経た明治十八年（一八八五年）九月、学は東京大学予備門を卒業し、東京大学理学部生物学科へ入学し、以来植物学者としての道を歩きはじめましたが、その動機の一部はこの白山登山にありました。

後年、博士は、この時目にした自然の美しさが、自分を植物学の道に進ませた原因の一つだったかもしれない、と次のように語っています。

「白山登山のとき、見慣れない樹木や、珍しい草花、岩にはえる美しい苔などを目にすると、心の中にえもいわれぬ感覚が起こった。このときに遊びで集めた草花の標本は、もとより学問的には意味はないが、今見ても、何とも言えない感動を私に与えてくれるのが不思議だ。」

「私が植物学を専攻することを決めたのは、白山登山をしてから数年後のことである。白山登山の後まだ三年ほどは、文学だけに関心があったが、それでも、植物学者になる

遠い原因がこの白山登山にあったことになる。」

後に学が文学から理学へ大きく進路変更をすることになりますが、この白山登山の経験がその布石としてありました。

師範学校卒業

明治十一年（一八七八年）七月、学は、石川県第三師範学校の高等科第一回生として、無事卒業しました。しかし、彼らの編入当時は、同級生が二十名いましたが、二年間の教育期間をおえた時、卒業できたのはわずか四名にすぎませんでした。それほど厳しい勉学が彼らには課せられていました。

学は卒業後、寄宿舎を出て、とりあえず三国港の西光寺へもどりました。伯父の性善も、やっと学が一人前の小学校教員になれると思い、大変に喜んでくれました。まもなく岩村の母や叔父からも喜びの手紙が届きました。しかし、学の気持ちは晴れませんでした。

学の心の中は、さらに上級学校の教師か文学の道へのあこがれがくすぶっていたのです。

白山
日本の北陸地方、白山国立公園内の石川県白山市と岐阜県大野郡白川村にまたがる標高 2,702m の山。

当時は、※学制の頒布により、全国には多数の小学校が設置されましたので、教員も大量に不足していました。まして、学のような正規の師範学校教育を受けた者はごくわずかで、就職先はいくらでもありました。

しかし、学が就職しないので福井町にある学務担当から伯父の性善宛にたびたび問い合わせの書状がありました。学は伯父からの詰問をさけるため福井町の元学友のところを転々と泊まり歩いていたのです。

伯父性善は、妹が息子の自立を誰よりも待ち望んでいることを思うと責任を感じ、一層困り果てました。その結果、この際、学を母親の元に帰したらどうかと考え、とよに相談の手紙をおくりました。

岩村に帰る

母親より帰郷を勧める手紙を受け取った学は、明治十一年（一八七八年）十月十一日、岩村に帰ることになりました。見送りには、伯父をはじめ西光寺で暮らしをともにした人や、小学校時代の友達の顔もみえました。学は、六年前この同じ坂井港にはじめて叔父に連れて来られたことを思い出し、胸がいっぱいになりました。

※学制
明治５年（1872年）に太政官より発せられた、日本最初の近代的学校制度を定めた教育法令。身分、性別に区別なく国民皆学を目指した。

学は、皆さんに心からお別れの挨拶をし、岩村に向けて出発しました。

明治十一年十月下旬、やっと学は、岩村に帰ってきました。久しぶりに見る故郷は一変し、あの岩村城は取り壊され（廃藩置県により明治六年入札、その後取り壊す）、今は石垣のみとなっていました。坂井港や福井町を知っている学の目には、岩村は山奥の一寒村にすぎない寂しい村と映りました。

久しぶりに会った母親の顔にも、老いの兆しがうかがえ、留守中の苦労がうかがえました。当時母とよ四十一歳、弟の源吉は十二歳、直吉は十歳となり、それぞれ子どもとしての分別もそなわり母親を助けていました。

母とよは、兄性善からの手紙で学が戻ってくることは承知していましたが、あれほど小学校教員になることを望んでいた我が子が今なぜそれを拒むのか分からず、直接本人が話してくれるのを待つしかありませんでした。

当時は、教員採用試験の制度がまだ確立していなかったので、小学校教員から尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校の教員に登用されることは不可能とされていました。そのためこのまま教員に採用されれば、生涯一介の小学校教員として終わるのかと学は思ったに違いありません。幼き日に教えをうけた亡父の期待を裏切ることなく、好

きな学問の道へ進みたいと胸に秘めていた学ですが、これ以上叔父にも、母にも経済的な負担はかけられませんでした。秀才とはいえまだ十七歳の彼には世間を渡る知恵もなく、どうにもならず一人で思い悩んでいました。それが学の就職拒否の理由です。

母のとよは、相変わらず何も話してくれない息子のことが気がかりで、とうとう当時の岩村の※学区取締に学の説得を依頼しました。

学区取締は学を説得することを快く引き受けてくれました。学は、石川県第三師範学校から費用（授業料や生活費）を借りており、この借金は小学校へ就職したとき、月々の給料から差し引いていく契約でした。もし学校に就職しない場合は一括して返済しなければなりませんでした。しかし、三好家にはそんなお金はまったくありませんでした。また、別の契約には、師範学校で授業料を納めずに卒業した者は、その期間と同じ期間以上勤務する義務もありました。

学区取締は、このような立場にある学に、順を追って丁寧に説明し、就職先についても親身になって相談にのりました。気乗りしない学もやっと説得に応じました。

その後、岐阜県の教員採用試験に合格した学は、土岐小学校（現在の瑞浪市立土岐小学校）に勤務することになりました。（本来なら福井県で奉職しなければならないので

※学区取締
　現在の教育委員会。

すが、福井県と岐阜県との話し合いで、岐阜県にて奉職することができるようになりました。）

経済的な理由と社会的にも果たさなければならない義務もあり、やむなく土岐村へ行くのですが小学校の教員にとどまることなく、必ず上級学校の教師になろうと彼は決意を新たにしました。学は、明治十二年（一八七九年）三月岩村を出発しました。

Ⅱ　教師時代

土岐学校の校長（首席訓導）として

明治十二年（一八七九年）四月、学はふるさとの岩村に近い岐阜県土岐村土岐学校（現在の瑞浪市立土岐小学校）に教師として赴任します。明治十四年に東京大学予備門（旧制第一高等学校の前身）に進むために退職するまで土岐学校の訓導兼校長として児童の教育と学校の経営に専念しています。

その時の学の年齢は十代後半で、今でいえば高校二、三年生です。当時としては珍しいことではなかったようです。学が教員になったころの教師は年輩の旧藩士だった人たちが多く、明治政府が制定した新しい師範教育を身につけた学は評判のよい新進気鋭の

土岐小学校の校長室に掲げられている三好学の顔写真。

教師でした。

学は土岐学校へ就職が決まるとさっそく岩村から土岐村へ移りました。初めは、民家の隠居に身を寄せることになっていました。しかし、当時の村長から、

「先生には隠居所では狭いでしょう。自分の隣家の二階が空いているのでこれを全部提供したい」

との申し出があり、学は喜んでその申し出を受けました。

こうして土岐村での教師生活が始まり、忙しい日々でしたが、決してひとときも無駄にはしませんでした。仕事の合い間を見つけて、石川県立第三師範学校の講義で学んだ内容を清書しました。極細の毛筆による繊細な絵と活字印刷かと思わせる美しい文字でぎっしり埋め尽くされた目を見張るような和装本が今でも数冊残されています。

土岐小学校での教育

土岐学校での正規の教員は学一人なので、全部の教室ではとても教えることができません。そこで、上等一級（最上級生）から授業生補助を任命し、生徒に下級の教室を教えさせました。授業生補助には教室を順番に担当させ、学はこれを指導監督しました。

三好学が在職時代の土岐小学校。

学は上位の上級一から四の教場を直接担当しましたが、授業生補助の授業は、彼ら自身の授業もあるので、それが終わってから担当させました。したがって、授業が遅れることがよくあり、やむを得ず自習をさせなければならないこともありました。

小学校には下等と上等があり、一級から八級に分かれていて、期間を六ケ月とし、毎週三十時間の授業がありました。その基準は、明治五年（一八七二年）十一月十日に出された『小學教則概表』に示されました。

当時の小学下等の教育課程は次の通りです。

◎綴り字・書き取り　◎単語・読本　◎輪講（数人が順番に講義する）・口授（口伝えに教えを授ける）　◎習字　◎算術　◎各科温習（各科の復習）

続いて、小学上等の教育課程は次の通りです。

◎習字　◎作文　◎読本　◎輪講（理学・地学）　◎算術（筆算・珠算）　◎余科　◎各科温習

明治十二年（一八七九年）九月二十九日、「学制」が廃止され、「教育令」が制定されました。学校名が土岐小学校と改名されました。これを機に、学は学校の校章を定めました。それから校章と同じ模様の棟瓦を校舎に用いました。

三好学が制定した土岐小学校の校章。

現在、瑞浪市立土岐小学校の校長室には歴代校長の写真が掲げられ、その最初に三好首席訓導の写真があります。ネクタイを締め、洋服の上にオーバーを着用し、鼻の下には左右にピンと勢いよく伸びたひげをたくわえた若い彼の顔がそこにあります。

『授業日誌』の作成

学の次女綾江の次男である安藤裕（筑波大学名誉教授、動物学専攻）のもとに、学が記した『授業日誌』の上巻が所蔵されています。その目次によれば、上巻は明治十二年（一八七九年）六月一日（第一号）より翌十三年（一八八〇年）五月五日（第二十号）までで、下巻は同年五月六日（第二十一号）より同年十二月二十五日（第三十一号）までとあります。さらに、付録も付けられています。

この『授業日誌』の内容は学が直接担当した授業のあらまし、定期試験の出題とその解答、各生徒の採点表、宿題に関するものなどです。また、本文上部の欄には学の所感、生徒の出欠席等、メモに類するものを毛筆の極細字で書き留めています。

この『授業日誌』は、普通の日誌ではなく、まるで教育学を専攻する学者のような、研究者の目で綴られているように思えます。明治初期における日本の教育の様子が分か

る貴重な資料です。

小学校教科書の編さん

学は、教育の現場に携わり、教育の基になる教科書がいかに乏しいかを痛感しました。

その当時の日本の教科書事情は、基本的には各府県、各学校に任されていましたが、文部省、東京師範学校で出版されたものが急速に全国に広まっていきました。

しかし、府県に対して教科書を調査したところ、不適切なものがあるとして、その使用を禁止したものがありました。（このようなこともあり、教科書についてはその後検定制度へと発展していきました。）文部省が使用を禁止したものの多くは修身、生理衛生でした。

学は、その修身や生理衛生、そして従来あまり出版されなかった郷土地誌に目をつけ、明治十三年（一八八〇年）の中ごろより『生理小学』の編さんに取りかかりましたが、これには大貫貫一郎の絶大なる協力がありました。大貫貫一郎は、敦賀県公立福井医学所の予科の理化学教師であり、福井伝習所の教諭も兼務していました。

学の書き上げた『生理小学』の教科書の原稿には大貫の補正が所々に見られ、図面な

どの挿入箇所を指示する付箋も添付されています。最終稿は、岐阜県師範学校と岐阜県庁学務課の審査を受けてから内務省へ送付され許可されています。この教科書の巻頭には、後藤新平による題字があります。『生理小学』は、人体論、五官、内部諸機、摂生心得よりなります。その説明には二十三の挿絵を使い、大変わかりやすくなっています。

十九歳にして学は、最初の出版をしました。同じように、『小学校修身読本』や『土岐郡地誌略』についても出版し、『生理小学』と同様に高く評価されました。

村瀬太乙に師事

学は、明治十二年（一八七九年）三月から土岐小学校を辞職する明治十四年（一八八一年）十二月二十八日まで土岐村に住んでいました。その間に村瀬太乙に師事し、漢籍と書道を学びました。学は、将来文学者になろうと思っていたからでした。この時は、植物学への興味はあったものの植物学者への道は考えていませんでした。

村瀬太乙については、学の記述には次のように紹介されています。

「先生の名は太乙といい、美濃国上有知村（現岐阜県美濃市）の人で頼山陽に学び、その晩年の門人である。名古屋の長島町に住んでいたが、天保の末犬山城主成瀬隼人

後藤新平（1857年～1929年）
日本の医師、官僚、政治家。拓殖大学第3代学長。

正住の誘いで、その名古屋邸で教授した。明治三年（一八七〇年）六十九歳にして犬山に移り、藩のために尽くしていたが、同十四年（一八八一年）七十九歳にして没した。私の若いころ、先生の家を訪ねて教えを受けた。」

とあります。

学は、土岐村から犬山の村瀬太乙の家まで約一年七ヶ月にわたって通いました。

太乙塾への通学は日帰りはできないので必ず一泊しました。学が泊まったのは犬山の木曽川河畔に立ち並ぶ旅館でした。

史跡名勝天然記念物の愛知県調査員であった梅村甚太郎の追悼文「故三好學先生をしのぶ」によれば、学と太乙との関係や当時の様子をうかがうことができます。

（追悼文）

「大正十一年ころでした。先生は木曽川付近を旅行の時、犬山に私の恩師があるからちょっとその墓に参りたいとおっしゃりました。先生とはだれのことですかと尋ねますと、村瀬太乙という人であると言われました。有名な方ですので私も一緒にと行ってお供をいたしました。ところが、犬山も以前とは違い大きな変化に驚かれたようでしたが、この墓だと探しあてられ、墓所付近の掃除をされ、しばらく恩師の墓前に黙祷をせられ

村瀬太乙

頼 山陽（1781 年～ 1832 年）
大阪生まれ、江戸時代後期の歴史家、思想家、漢詩人、文人。

ました。これで、願いも叶って気が清々したといわれました。なんでも先生は若いころ、土岐村からここまで通って苦学を重ねられた様子でした。」

義理堅く人情深い学の人間性がうかがえる一文です。

東京大学予備門をめざす

学は、かねてより東京大学の文学部で学び、ひとかどの文学者か、あるいは上級学校の教師になろうと思っていました。

東京大学へ入学するには東京大学予備門を卒業する必要がありました。当時、予備門には天下の英才が集まり、ここへの入学はとてもむずかしいものでした。在学中の勉学はさらに厳しく、卒業することは入学以上に困難だといわれていました。しかし、それよりも学が今回岐阜県の訓導を退職することの方がはるかにむずかしかったと考えられます。その理由は、石川県第三師範学校の時代給費生となり石川県の世話になったので、本来ならば学は石川県の小学校に就職すべきところ自己の都合で岐阜県に戻り就職したところにあります。そのため学の育成に何ら貢献しなかった岐阜県は石川県から相当に厳しい批判を受けたことでしょう。

岐阜県に着任した学は、まもなく『生理小学』、『小学修身』、『土岐郡地誌略』と矢継ぎ早に小学生用の教科書を編さんし、岐阜県の小学教育に貢献しました。岐阜県庁としてもその成果を認めていました。そして、これからもきっと岐阜県のために尽くす立派な教育者になるものと期待されていました。そんな状況でしたので、学が今回退職を申し出ることになれば、当然岐阜県より猛烈な反対がくることは明らかでした。

地元の教育関係者は、学の性格と力量をよく知っていたので長くここにとどまるものではないと覚悟していました。そこで、地元関係者はいろいろ手を尽くし、後任をみつけて岐阜県を説得する努力をしました。

人々の理解と協力のおかげで岐阜県の説得に成功しました。学は、意外に早く決着がついたことに驚きました。そうしてくれた関係者に深く感謝しました。

土岐小学校を辞職し上京

学は、明治十四年（一八八一年）十二月二十八日、土岐小学校を辞職しました。学と別れを惜しむ先生・生徒・父兄・村人達を後にして、彼は通い慣れた小里川沿いの道を岩村へと帰りました。

明治十五年（一八八二年）の元旦を学は家族と一緒に迎えましたが、岩村での正月はこれが最後になりました。

この年の一月、東京大学予備門を目指す学は、書籍を携え岩村を出発し、四日市港（三重県）の旅館で東京へ行く船を待っていましたが、その時のはやる気持ちを詩に託しています。

一月十日出家遊學干東京。途上吟（一月十日家を出てここに東京に遊学す。途上吟）

霜風吹雪寒　霜風雪を吹きて寒し
経過幾山々　経過す幾山々
欲遂青雲志　遂げんと欲す青雲の志
一心誓不還　一心誓ひて還らず

学は、文学者を目指し村瀬太乙に師事しただけあって数多くの詩を残しています。この詩もその中の一つです。下田歌子が青雲の志を抱いて岩村を出立し中馬街道の柿野宿を過ぎ、三国山を振り返り詠んだ歌と同じく、立派な人間になるまではふるさとに帰らないという並々ならぬ決意がうかがえます。

（下田歌子が岩村から東京へ向かうとき三国山を振り返り詠んだ歌）

綾錦　着てかえらずば　三国山　またふたたびは　越えじとぞ思ふ

「志をとげて立派な人間になり、美しい綾錦の着物を着て帰らなければ、三国山をもう一度こえてふるさと岩村へもどろうとは思わない。」という趣旨の歌です。

Ⅲ　予備門・大学生時代

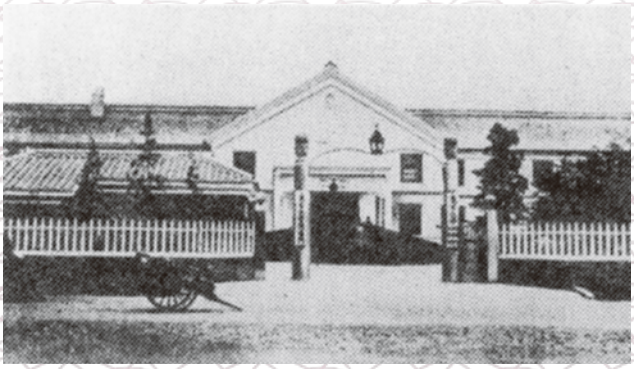
入試に向けての勉強

学は、明治十五年（一八八二年）一月下旬東京に着き、母とよの実家である中嶋家を訪ねました。母の長兄である五代目左右治は学の寄宿を快く許してくれました。

さっそく予備門の入試を専門的に指導していた近藤則意を訪ね、入塾を許可してもらいました。

近藤塾では、数学や英語は初級から指導を受けました。英語のスペリングは日増しに上達し、的確でなめらかになり、数学の用語はほとんどが英語で表現できるようになりました。

当時、東京大学予備門へ入るには、私塾で英語や数学を学ぶことが早道でした。学が



東京大学予備門と東京大学の正門と本館。

入塾した近藤塾もこのような私塾の一つでした。

予備門の入学試験と学業

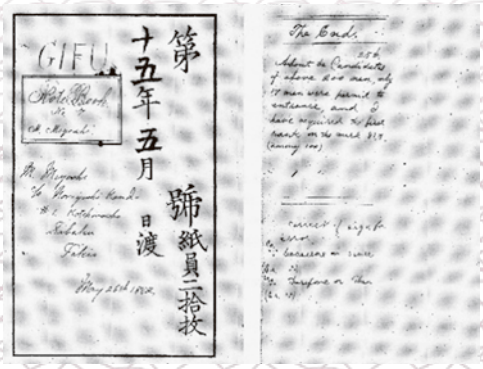
学の予備門入学試験は明治十五年（一八八二年）八月二十三日から二十四日にかけて行われました。そして、合格発表が翌日の二十五日にありました。

当時のことを学は、メモに次のように書き残しています。

「二百人以上の志願者に対して、十七人のみが入学を許可されました。そして、私は（百点満点のうち八十一・七点）首席を獲得しました。」

学は抜群の成績をおさめることができ、今後の予備門での学業へ自信を深めました。

東京大学予備門における勉強はとても厳しいものでした。進級することは入学すること以上にむずかしいと言われました。しかし、学は、優秀な成績で進級することができました。その裏には、彼のたゆまぬ努力がありました。学の予備門時代のノートや清書された和装本からもその一端をうかがい知ることができます。例えば、「日本歴史学」では、講義内容ごとに和装本一冊に整理され、清書されています。そのほか、英語、数学、生物学、物理学、化学などの学科については二十数冊のノートがあり、それらはす



受験勉強したことをまとめた学のノート。右側は最終ページにあるメモ。首席で合格したことが英語で書かれている。

べて整然と英文で記されています。

明治十七年（一八八四年）七月、学は予備門第二級（二年生）の学年試験に無事合格し、上京以来、初めての夏休みに郷里の岩村に帰りました。当時、弟の源吉（十八歳）を小林家の養子にと、叔父の小林制から話があり、その相談のために彼は東京から呼び戻されたのです。

学は、土岐小学校の時代に教えた市岡太次郎を、明治十五年（一八八二年）東京へ呼んで私立共立学校で学ばせ、東京大学予備門へ入学させました。このときの帰省には、市岡太次郎も同行し、東京へ帰るときも一緒に帰京しています。帰るときは、末弟の直吉も一緒に三人で東京を目指しました。

矢田部良吉教授との出会い

学たち三人は、帰る途中に箱根湯本の旅館に宿泊しました。そこで偶然にも東京大学理学部の矢田部教授が同宿していることを知りました。学は、九月から予備門の最上級生になりますが、まだ大学での専攻学科は決まっていませんでした。学は、植物好きで、大学で植物学を教えていた矢田部教授の名はかねてより聞いていました。さっそく面会

矢田部良吉（1851年～1899年）
明治時代の日本の植物学者、詩人。東京大学植物学教授。

して、そのとき箱根山中で採集した白い小さな花が咲き細かい葉がついた草の名を尋ねたところ「マツカゼ草」と教えられました。学が矢田部教授から植物の名について教えを受けたのはこのときが初めてでした。

このようなことが動機となり、彼の理学への志向も次第に固まり、やがて植物学の道を選ぶようになっていきます。

文学から※理学へ

当時、理学を志す者たちが、日本の将来を担うために、欧米の科学技術を修得するのに必要な学問や技術を一生懸命学んでいました。学の周囲にもそういった仲間が多くいました。そのような様子を見ながら学は、いつしか漢学を通して文学へ傾倒していった自分の進路に疑問をもつようになりました。

当時の日本は、欧米の列強国に加わることを目標として官民あげて突き進んでいました。そのため、外国帰りの技術者が貴重な存在とされ、また、科学者も海外文献の翻訳者ではなく、本格的な科学を追究できる人が必要とされました。そして、日本の植物学も、生物学の一分野として見直される時代となりつつありました。

マツカゼ草
花期は8～10月。枝先に円錐状集散花序を出し、多数の白色の花をつける。

※理学とは 自然科学の基礎研究の諸分野の総称。物理学、化学、生物学、地球科学、天文学、数学を指す。

学は、将来文学者か上級学校の教師になるつもりでこの予備門に学んだのでしたが、いつしかこうした社会の変化と自分の興味をもつ文学の将来とを比較するようになりました。そして、自分の興味が理学の分野へと移りつつあることに気づき、たいへん悩みました。しかし、とうとう植物学を選び、人生での大転換を図ったのです。

学は、かつての白山登山にもその動機があったことを次のように述べています。

「白山で偶然にも得た植物への感動は、その後の進路選択に大きな影響を与えました。このことは、自分でも予想できないことでした。」

自分の進路変更を迷う中で、東京大学の予備門を卒業しました。

予備門における進級は、厳しい試験と評価が課せられました。それを、一度の失敗もなく卒業できる者は卓越した才能に恵まれ、しかも非常な努力家でなければなりませんでした。そんな中で、学は抜群の成績でこの予備門を卒業することができたのでした。

日光での植物採集

学は、東京大学予備門をめでたく卒業し、東京大学理学部生物学科に入学できることも決まりました。ちょうどそのころ学は、植物学教室の松村任三助教授たちが日光地方

植物採集に使う胴乱と野冊の説明
三好学が『中等教育植物学教科書下巻』で説明している。

へ植物採集に行くことを知りました。

学は、生涯を通じて数多くの植物採集旅行に行っていますが、東京大学入学直前に行った日光での旅行が本格的な採集旅行の始まりでした。採集旅行では教授や助教授が学生を連れて行くという形で行われました。現地で植物分類学を実地で指導し、採集植物の標本制作技術と標本の記録や管理などを教えました。昼間は移動と採集をし、夜は街道沿いの民家や山間のさびれた温泉宿に泊まりました。燈火も暗く狭い部屋の中で夜おそくまで、時には明け方までかかる標本作業は、たいへんなものでした。それ以上に標本の運搬が大変でした。移動するときは、出発に先立ち、採集した植物を標本にするために必要なもの（圧板、吸湿紙、古新聞、梱包用の油紙や行李など）を拠点である日光湯本の旅館に別送しました。これらの物品は数量的にも、重量的にも相当なものでした。そして、各人は採集した植物を入れる胴乱と野冊を携行して行きました。

関東平野の北端にある日光駅と白根山では二千メートルの標高差があるばかりでなく、この奥日光は山・渓谷・高原・湖沼・湿原というすべての条件を備えているため植物の分布が複雑で落葉広葉樹・針葉樹・湿原植物・水生植物・高山植物など広範囲にわたり、その種類も大変豊富です。そのため、これらの植物が創り出す奥日光の植物景観

日光白根山は、栃木県日光市と群馬県利根郡片品村の境界にある標高 2,578m の山。

は学問的にも貴重なものです。

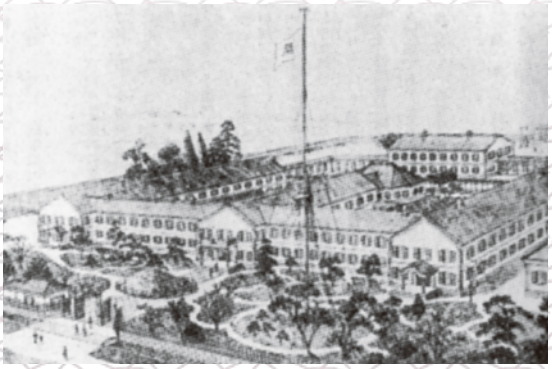
松村助教授は、学生たち一行をていねいによく指導し、男体山や白根山をはじめとする渓谷、湖沼、湿原をくまなく歩き、観察を重ね、草木の生態に触れさせ、学生たちに多くの感動を与えました。

この日光採集旅行では約八百種類の標本を採集したと記録に残っています。一つの標本を作るのに、最低二～三枚の押し葉を必要としますので、採取した押し葉の数は二千枚を超えるものと思われます。

学は日光湯本温泉で過ごしたこの夏の思い出を生涯忘れませんでした。叔父の小林制にもこの日光採集旅行の詳細を手紙に書いて送っています。その後も、学はたびたびこの地を訪れ、日光の植物に関する著作物も出しています。

東京大学理学部生物学科

東京大学は、神田一ツ橋通町の元東京開成学校において明治十年（一八七七年）に創立されました。それ以後、本館にあった理学部は、明治十八年（一八八五年）九月七日本郷富士町に移り、植物学、動物学、地質学の各教場は俗に青長屋と称せられた建物



東京開成学校（東京大学の前身）
明治６年落成当時の様子（スケッチ）。

（青ペンキ塗り）に移転しました。

学は明治十八年（一八八五年）九月、二十三歳で東京大学理学部生物学科へ入学しました。当時の生物学科の学科課程は、一年で基礎学科、二・三年で動物学、植物学、無機化学、自然地理学、外国語を学び、四年で動物学、植物学のいずれかを専攻する修学四ケ年の学科でした。植物学の教授は矢田部良吉で、助教授は松村任三と大久保三郎でした。

この時、学は牧野富太郎と出会っています。牧野は学への追悼文の中で、その出会いを次のように述べています。

「私が初めて東京大学の植物学教室へ行ったのは確か明治十七年であったと覚えているが、それが何月の何日だったかは覚えていません。最初にだれが教室へ案内していってくれたかも覚えていません。その時の教室が青長屋と呼ばれていて、そこで学生の三好君と知り合いになりました。」

その後、この二人は五十年以上の長い間仲良く付き合い、それぞれが立派な学者となり、学は七十八歳、牧野は九十五歳でこの世を去りました。

牧野富太郎（1862年～1957年）
日本の植物学者。高知県高岡郡佐川町出身。

大学での植物採集旅行

学は、大学時代も多くの植物採集旅行に出かけています。主なものとしては、明治十九年（一八八六年）六月中旬より七月にかけて矢田部教授が越後の清水峠、五頭山、佐渡の金北山、猪苗代地方に植物採集旅行に出かけたときに学もそれに同行しています。

同年七月十日からは一人で碓氷峠、和田峠、塩尻峠、鳥居峠と植物採集をして、七月十四日寝覚駅（現在はありません）より木曽駒ケ岳に登り、山頂で一泊し、翌十五日に下山し、寝覚駅に戻ってきました。この時、初めて見たモウセンゴケは学の興味をひきました。そして、この学の採集旅行は日本で初めての高山植物の研究の始まりともなりました。

その後、学は故郷岩村に立ち寄り、土岐村に寄って帰京しました。

同時期、創刊されたばかりの『植物学雑誌』に駒ケ岳の植物採集旅行の記事を載せています。この冊子には学の駒ケ岳のスケッチが付けられています。また、この採集記は学の記念すべき最初の発表記事で、作家が書いたといっていいほど流ちょうな文章で綴られており、牧野富太郎もほめていました。

九月には、郷里の近くの恵那山にも植物採集に訪れています。

木曽駒ケ岳
長野県上松町・木曽町・宮田村の境界にそびえる標高2,956mの山で、木曽山脈（中央アルプス）の最高峰。略して木曽駒と呼ばれる事もある。

当時の植物学は江戸時代からの「本草学」の流れをくむ分類学が主体で、明治十年（一八七七年）創設から日も浅い生物学教室は、研究用の標本採集に力を入れていました。そのため、夏休みがこれにあてられ、採集旅行がしばしば行われています。

理科大学動植物学科に再入学、そして卒業

明治十九年（一八八六年）三月、帝国大学令により東京大学は帝国大学に、理学部は理科大学に改められ、四年制から三年制になりました。つまり、第二次世界大戦前の大学のスタイルがこのとき出来上がったのです。そのため、学は、同九月に理科大学動植物学科に再入学することになりました。この新制度では第一、二年生は動植物学科、第三年生は動物学科と植物学科に分かれていました。

その当時も植物学の教授は、矢田部良吉、助教授は大久保三郎、松村任三でしたが、松村任三はドイツ留学中でした。

学は大学においても、成績優秀で品行方正で、大学から月七円の褒章給費を受ける特待生でした。予備門の間も「学力最優秀等品行最端正」により、理科大学から褒章給費生として月五円の給費を受けていました。貧しい学にとってこのことは大変ありがた

創立当時の東京帝国大学の正門（赤門）。

いことでした。しかし、これだけでは十分ではなく苦労しながら大学生活を送りました。

そして、努力が実り、学は明治二十二年（一八八九年）七月、『日本地衣類の解剖』と題した卒業論文をまとめ、優秀な成績で理科大学を卒業しました。

このころの家族の様子

（母の上京）

このころは、学の兄弟三人とも岩村より外に出てしまっていました。江戸生まれでもともと岩村の人間ではない母とよを一人でここに住まわせるのが心配になり、学は思い切って母を上京させました。当時、母は四十七歳か四十八歳でした。

学の母とよは、江戸で生まれ、岩村藩の江戸詰めの三好友衛と結婚しました。そして藩命により慶応四年（一八六八年）二月に、源吉と学との親子四人は、藩主から頂いた屋敷のある岩村に移りました。それ以来、とよは岩村に閉じこもることになってしまいました。しかし、子供たちもそれぞれ成人したので、やっと上京することができました。とよの実家（中嶋家）は東京の芝にありましたが、学の通学を考え、理科大学に近い本郷区西片町の借家におちつきました。

（中嶋家のこと）

母とよは、中嶋家四代目中嶋弥源太の次女でした。長男は政信といって、学が上京し東京大学予備門受験準備の時から合格まで世話をしました。合格後は、政信の後妻のきんと伯母のマキの協力によって学は予備門を卒業することができました。その後、東京大学理学部生物学科一年生の途中まで中嶋家で世話になりました。

政信のすぐ下は次男の性善で、学が西光寺でお世話になった伯父さんです。性善のすぐ下が長女シマで、学の母とよのすぐ上の姉です。学はこの伯母にはずいぶんと援助を受けました。

「中嶋シマさんは、宮中で女官を務め、生涯独身でした。シマさんは三好さんの母親の姉で、妹のとよさんや甥の学さんが上京してからは、経済的に困ったことがあればそのつど力になってくれ、三好さんの出世には大いに貢献した人でした。その後シマさんは三好家に同居し、亡くなったときは、中嶋家の菩提寺である十方寺の『中嶋家先祖代々の墓』の横へ墓を建立しました。その墓の建立者には三好学と書いてあったそうです。」と、後日学の親戚にあたる人が話していました。

学は自身の能力と努力で大学に入学でき、通学もできましたが、親せきの方々の世話

がなければそれができなかったことをよく分かっていました。そして、その恩を決して忘れず、恩返しを必ずしています。

（弟たち）

三男の源吉は江戸で生まれ、父母や兄の学と一緒に慶応四年（一八六八年）に岩村に移りました。そこで立派に小学校教育を受け、当時としては最先端の電信技術の一部を習得し、電信局員として勤務しました。最初は、春日井と多治見の間にある内津の電信局で専用回線を保守管理する部門で働きました。その後、源吉は、名古屋へ転勤しました。そこで、きくという娘と結婚しました。日清、日露の戦争の時は、軍用電信員として出征しました。戦後も郵便局員として勤め、最後は、名古屋駅に近い笹島局の局長となって大正十二年（一九一五年）五十五歳で定年を迎えました。その後も、名古屋の第八高等学校の嘱託となり事務を執っていましたが、昭和十一年（一九三六年）三月、六十九歳をもって退職しました。この再就職にもひょっとして学の援助があったかもしれません。昭和十七年（一九四二年）八月六日、米軍がガダルカナル島に上陸し、日米両軍の死闘が始まったその翌日、源吉は七十六歳の人生を閉じました。

四男の直吉は、サンフランシスコで日本福音協会の宣教師となり活躍しました。直吉

は書物を出版するために太平洋戦争直前日本に帰ろうとしましたが、乗船間際にサンフランシスコで亡くなったといいます。

Ⅳ 大学院生時代

東京英和学校の講師となる

この時代、学は土岐小学校の教師であった時と同じように、次々と書物を書いています。

例えば、明治二十一年（一八八八年）に『植物自然分科一覧表』、翌年の二十二年（一八八九年）には『植物教科　陰花植物大意』、二十三年（一八九〇年）には、『中等教育　植物教科書上・下』、二十四年（一八九一年）には『普通植物学教科書』などです。この教科書は評判がよかったらしく第十三版まで出しています。

明治二十一年（一八八八年）から二十四年（一八九一年）の三年の間に多くの著作物を残していますが、これは、未亡人となった母と二人の弟たちを支えるためだったと思われます。

学は大学院に進学しても給費生となりましたが、これだけではとても暮らしていけな

かったので、大学の許可をもらって、東京府豊島郡渋谷村にある東京英和学校（現・青山学院）の講師になりました。生徒は予備学部の四年生と高等普通学部の一年生から四年生までででした。授業科目は植物学、動物学、生理学、鉱物学、地質学、地文学でした。勤務は毎週水・木曜日の午前八時から十二時まででしたので、本郷西町から渋谷村の現・青山学院までの片道十キロメートルの道を通勤しました。学は明治十四年（一八八一年）末まで土岐小学校の児童を教えましたが、今度は中等学校の生徒を教えることになり、久しぶりに興味がわいてくるのでした。しかも上級の学校で内心うれしくてたまらなかったと思われます。

郷里・岩邑小学校での講演

大学院生となった年の夏休み、学は地衣類を採集するために御嶽山に採集旅行を行ないました。御嶽山は地衣類の種類も多く採集した標本も大きく、多量に採集することができました。

御嶽山を下山した学は、郷里の岩村に立ち寄りました。帝国大学理科大学を卒業した理学士としての帰郷であり、故郷へ錦を飾ったことになります。母はすでに東京に移っ

現在の青山学院大学の外観。

ていましたが、岩村では親せきや知人が温かく迎えてくれました。

学が岩村に来たことを知った多くの教育関係者は、夏休み中でしたがぜひとも彼に講演をしてほしいと申し入れました。学は、かつては土岐小学校の首席訓導であり、お世話になった方々の依頼でもあったのでこころよく引き受けました。会場は地元の岩邑小学校の講堂で、講演には、地元の学校の訓導や多くの教育関係者が集まりました。

学は彼らを前にして「博物学の研究を諸君に勧める」と題して講演をはじめました。

演台に立った学は、あいさつの後、この岩村を取り囲む山々、丘陵、田圃、そこに生い茂る森や林、そこに住む昆虫、川魚、そして、この地に産出する金石、化石へと話を進めて、本論に入りました。

本論では、前半で、ダーウインの進化論などを例にとり、博物学の進化史を話しました。講演の後半は、「博物学の応用」についての話になりました。

その話をする中で、

「学問には、もともと理論と応用の二つがあるのではなく、学問はすべて物の理を追究することなので、どこまでも理論である。しかし、その理論を実際にあてはめ、私たちの社会に役立つようにすること、これを応用という。」

など、博物学に限らず、学問に対する考え方も話しました。また、講演の終わりには研究に対する姿勢について、

「…みなさんはこの私の話で、※博物学の目的を理解されたと思います。この学問はいたずらに動物や植物、金石などを集めまくるものでもなく、また、いたずらに理論を振りかざすものでもありません。もちろんこの学問を研究するためには十分な時間と学力を必要とします。また、一人でこの学問を全部研究できるものではありません。私がみなさんに望みたいのは、あえて貴重な時間をこのために使うのではなく、仕事の合間や、余裕のある時に実物をよく観察して、できるだけ実験研究をしていただきたいということです。実験して知り得た知識は深く脳裏に浸透して忘れることはありません。いたずらに書物を通読して得た知識に比べれば、その正確なことは言うまでもありません。」

と講演を締めくくりました。

学は、この講演を通して、「学問とは何か、どのように取り組んだらよいか」を訴えたのでした。

※博物学
自然に存在するものについて研究する学問。広義には自然科学のすべて、狭義には自然物についての収集および分類の学問。東洋では本草学がそれにあたる。

生涯の転機―ドイツへの留学

学の生涯最大の転機となったのは、国費によるドイツのライプツィヒ大学への留学でした。学が二十九歳の時でした。

明治二十四年（一八九一年）八月十九日、横浜港発、蒸気船エンプレス・オブ・ジャパンでカナダのバンクーバーに、二十九日に到着しました。そこからカナダ鉄道でロッキー山脈を越え、五大湖の横を通り、七日間の旅をして、ニューヨークに九月五日に到着しました。同日ドイツ船フルスト・ビスマルクで大西洋を横切って、英国サウザムプトンに寄港して、ドイツのクックスハーベンに着いたのが十八日の朝でした。それから汽車でハンブルクを経由して、目的のライプツィヒに到着しました。

学は、この大旅行で、北米大陸の規模の大きさや、ライプツィヒの規模や大学の様子などに驚いています。

ライプツィヒ大学にはそのころ世界第一の植物生理学者ヴィルヘルム・ペッファー博士がいました。

ペッファー博士は、ドイツの植物生理学の創始者として有名なザックス教授の弟子であり、当時植物生理学者としては世界的な存在でした。

ヴィルヘルム・ペッファー博士
(1845 年～ 1920 年)
ドイツの植物生理学者：世界中の多くの研究者を育てた。

エンプレス オブ ジャパン

高名な同教授のもとには外国からの留学生も多く、それらの弟子たちがそこで研究し、そして祖国に戻り、その国の植物生理学の基礎を築いています。学もその一人で、帰国後の学の活躍が今日の我が国の植物学の発展の始まりになったのです。学はペッファー博士を大変尊敬していて、常に姿勢を正したうえで「ペッファー先生」と呼んでいたそうです。

ところで、このペッファー博士の蔵書一一七三〇冊が大原孫三郎に譲渡され、倉敷にある岡山大学農業生物研究所に『ペッファー文庫』として大切に保管されています。

なお、学の高弟の柴田桂太博士も同博士の指導を受け、多くの業績を残しています。

学がペッファー研究室へ入ったころの研究テーマは、植物の刺激感応運動が中心でした。学に与えられたテーマは「菌糸の屈化性」についてで、学は見事にこの研究を完成させました。これを高く評価したペッファー博士は、自ら学会へ紹介しました。これは学の留学二年目のことで、学自身の論文としては初めて植物学の専門誌に発表されました。これ以外にも、「菌糸の細胞膜貫通」や「花粉管の刺激運動」に関してもドイツの学会誌に発表することができました。これらもペッファー博士の後押しのおかげでした。

明治二十八年（一八九五年）、学は三年四ケ月の留学を終え帰国の途につきました。

ペッファー文庫
ドイツの元ライプツィヒ大学教授ペッファー博士（1845～1920）の蔵書、全11,730冊。1921年、前年に亡くなった博士の蔵書が売りに出され、大原孫三郎氏の命により一括購入された。

大原孫三郎
（1880年～1943年）
日本の実業家。倉敷紡績及び倉敷毛織（現・クラボウ）、倉敷絹織（現在のクラレ）、中国合同銀行（中国銀行の前身）、中国水力電気会社（中国電力の前身）の社長を務め、大原財閥を築き上げる。

同年二月九日ライプツィヒを出発し、三月十日にシンガポールに到着しました。十二日に同地を出て十四日にジャワ島に着き、そこでボインテンゾルグ（現ボゴール）植物園長のトレーブ博士を訪ねました。三月末までこの世界有数の熱帯植物園に滞在して、トレーブ博士のもとで熱帯植物を観察し、研究を行いました。ここでの経験がのちに学が植物生態学へ進むきっかけになりました。

それから、ジャワ島を発った学は、シンガポール経由で同四月十八日、無事帰国しました。帰国後の学はまさに順風満帆でした。岐阜県出身の※脇水鉄五郎教授は当時の学の様子を見て、次のように語っています。

「三好博士の植物学における専攻は、生理学と生態学でした。もともと分類を中心に研究してきた日本の植物学は三好博士によって新しい分野を切り拓いたといってもよい。こうして、三好博士は日本の植物学会の発展に当たって指導的立場に立たれていました。大学教授としても、専攻の研究のほか、多くの学生を育てられ、また、その研究を指導された。三好博士の残された功績は、植物学会に残された功績と共に極めて偉大なものです。」

脇水博士は、学のことを同郷人として誇りに思っていました。

※脇水鉄五郎（1893年～1942年）
美濃大垣藩出身。東京帝国大学教授。専門は地質学。晩年は、三好学と同じく、史跡名勝天然記念物調査員として活躍する。

軍人・大島健一との出会い

学は軍人大島健一と会う機会がありました。学者と軍人との取り合わせは一見奇妙ですが、実は幼馴染みといってよい関係です。三好家と大島家は岩村・熊洞（五区、新屋敷）にあって、両家は百メートルと離れていませんでした。大島健一の方が学より三歳年上であり、二人は幼い一時期を共に遊んだと思われます。

大島家は下級武士であったので、その当時は格式を重んじる時代で、年下の学の方がリーダーシップをとったのかもしれません。

明治になって岩村士族から出た名士は「大島健一、下田歌子、三好学」の三人です。

二人の再会は、明治二十六年（一八九三年）のドイツでした。大島健一は明治十二年（一八七九年）に陸軍士官学校に入学、同二十三年に選ばれて大尉でドイツへ留学しました。学が明治二十四年にドイツへ留学したので、そこで再会したわけです。その時のことを学は叔父の小林制に知らせています。その後、学は世界的な植物学者に、大島健一は陸軍大臣に出世をしました。

下田歌子も、二人が再会した明治二十六年（一八九一年）に欧米各国へ視察に行っていますが、三人が出会うことはありませんでした。

下田歌子
出生名：平尾 鉐
(1854 年～ 1936 年)
日本の明治から昭和期にかけて活躍した教育者、歌人。女子教育の先覚者で、生涯を女子教育の振興にささげ、実践女子学園の基礎も築いた。

大島健一
(1858 年～ 1947 年)
陸軍中将、陸軍大臣、大東文化学院第 3 代総長、三好学の幼馴染み。

V 大学教授・名誉教授時代

理科大学教授に就任

明治十九年（一八八六年）に発足した東京帝国大学は、同二十六年（一八九三年）に講座制を導入することになり、動物学においては二つの講座が開設されました。しかし、植物学には、一講座が割り当てられるというアンバランスなものでした。

これは、動物学には大森貝塚の発見などで知られた外国人教師がいたのに、植物学の教授陣にはそれがいなかったためです。翌年の明治二十七年（一八九四年）、大学の評議員会はこのバランスをとるために、文部省に植物学も二講座制にするように要請しました。そしてそれが次年度から認められるようになりました。

明治二十八年（一八九五年）四月、ドイツの留学より帰国した学は、翌五月、幸運なことにこの新設の植物学第二講座に三十二歳の新進気鋭の教授として迎えられました。学の帰国に合わせての教授就任は、彼が国費留学生としてドイツに派遣された時点で実験植物学の教授候補になっていたようです。それは、大学院生の中でも抜群の学力があり、年齢も高く、文学の素養が深く、小学校での教育経験もあったからです。

学の第二講座は、それまでの分類学を中心とした植物学に、生理学のような「実験

植物学」を導入するためでした。この時から日本の近代植物学への歩みが始まりました。

学の講義は、第一年次は普通植物学、第三年次が新設の植物生理学でした。そして、明治二十八年（一八九五年）七月、学は東京帝国大学から理学博士の学位を授けられ、本格的な研究者としての道を踏み出すことになります。

結婚、新進気鋭の教授として

学は、帰国後間もなく、当時政治家・小説家として広く知られていた矢野文雄の長女ミツと結婚しました。媒酌人は松村任三教授とミツの叔父の岩田武雄（錦城学園校長）でした。ミツは華族女学校（下田歌子が中心となって創設した学校）出の才媛でした。二人のなれそめは、学がどこかの園遊会でミツを見染めたらしいとのことです。ミツは当時としては、比較的大柄、面長の美人で、晩年でも九人の子供を育てたとは思えないほどきちっとした上品な優しい老婦人でした。

学はドイツからの帰国にあたり、当時の最新式の実験用の機械器具と多くの植物学参考書、純粋培養機を持ち帰ってきました。このことは、わが国の植物学史上、特に注目すべきことでした。

松村任三
（1856年～1928年）
東京帝国大学理学部植物学教室教授、附属小石川植物園初代園長。三好学と同時期の教授、共に植物学を研究した。

矢野文雄
（1851年～1931年）
三好学の妻ミツの父、宮内官および清国全権公使、小説家でペンネーム矢野龍鶏として『経国美談』（岩波書店）を執筆。

そのころの学にかかわる記述に次のようなものが残っています。

「三好教授の講義は甚だ斬新なるもので、名辞美句をもって学生たちをひきつけました。また、生理学に関する実験も目新しいことが多く、学生に異常なほど興味を持たせていました。」

このドイツ帰りの学の指導により、日本の実験植物学が急速に進むことになります。こうして我が国における植物生理学は、直接的にも、間接的にも学の学風に沿うようになりました。

生態学・植物変異の研究、自然保護への始動

帰国後十年目ごろから、学は次第に生理学とあわせて、生態学と植物変異の研究をはじめています。

「私は新しく植物生態学という訳語を作りました。」

という言葉を冊子の巻頭言に書いています。これが一般に用いられている学術語になりました。

学は、第二講座名を「植物生理学」から「植物生理学生態学」に改め、講義と実験に

錦城学園
福沢諭吉の高弟である矢野文雄が、慶應義塾旧医学校跡に創設した、三田予備校を源流とする慶應義塾の関連校。

も生態学を加え、日本における植物生態学がこのときに誕生することになりました。

さらに、明治四十年（一九〇七年）の夏から秋にかけてインドとジャワ島を視察し、大正二年（一九一三年）から三年かけて文部省在外研究員として欧米学術視察の旅に出ました。

シベリア経由でスカンジナビア、ドイツ（旧師ペッファー教授をライプツィヒに訪問）、オーストリア、イタリアのリビエラからイギリスに回り、次いでアメリカにわたり、フロリダの熱帯的植物景観、アリゾナ砂漠植物を観察し、太平洋のハワイに寄り、帰国するというハードな行程でした。この学術視察についても帰国の年に『欧米植物観察』としてまとめ、欧米の植物景観、植物学研究所の数々を紹介しています。

注目したいのは、この中に「天然物保存事業」の章を設け、「保存の方法」を説明していることです。当時、この分野の世界的指導者であったプロシアのコンベンツ教授にたびたび会い、多くのアドバイスをいただいたことを述べています。

また、学は、明治三十九年（一九〇六年）に「名木の保存について」の論説を発表しました。その中で、「今日、自然物、特に巨樹、名木の保護がいかに重要であるか」を説明しています。この記述が、学の「天然記念物保護」の最初のものです。このころか

ら学は自然保護についての大切さを訴え、活動を具体的にはじめていきます。

野口英世博士との出会い

大正二年（一九一三年）の九月に野口英世博士が、ウイーンで開かれたドイツ医学総会に招かれて特別講演を行いました。それに合わせて、ベルリンの日本大使館が野口博士の歓迎会を開きました。この席に学も招かれて野口博士と会いました。日本への帰路、ニューヨークのロックフェラー医学研究所に野口博士を訪ねることになりました。大正三年（一九一四年）、学は博士の案内で研究所を訪問し、世界第一の野口博士の研究や研究施設の詳細な説明を受け、大きな感動を覚えました。このような関係があったので、野口博士が母国日本の理学博士となるために、学はいろいろお世話をしました。

野口博士は理学博士請求論文「スピロヘーターに関する研究」を東京帝国大学に提出し、学がそれを審査しました。そして、野口博士に理学博士号が授与されたのです。

「櫻の会」の発足と機関誌『櫻』の発刊

かねてから念願だった「櫻の会」がやっと発足しました。学は名誉顧問として会に名

野口英世（1876年～1928年）
医学博士（京都大学）、理学博士（東京大学）。専門は細菌学で黄熱病、梅毒の研究は有名である。

前を連ねました。会頭には、男爵渋沢栄一、評議員には新渡戸稲造を迎え、会員は賛助会員四十七名、正会員四十六名、普通会員二十六名、少年会員三十六名で総勢百五十五名でした。会の事務局は帝国ホテルという超豪華な会になりました。

大正七年（一九一八年）四月二十日に機関誌『櫻』の第一号を発行し、その中に学は十三ページに及ぶ寄稿をしています。内容は、「世界の桜」「日本の桜」「桜の来歴」「桜の美性」「桜の名所」「桜の植え方」等です。桜全般について熱のこもった内容でした。

土岐尋常小学校へ桜を贈る

土岐尋常小学校が新築移転したことを知った学は、校庭に植えるようにと桜の苗木を数十本贈りました。しかもこれらの苗木は、それぞれ異なった品種なので、開花期も花の色も形も異なり、桜の時期はすばらしい景色であったと言われています。

ちょうどその当時、桜と花しょうぶの変異について特に興味を持ち、その培養品種や野生の変種を集め、小石川植物園の一角に培養して研究を進めていました。その中から、各種ごとに二、三本ずつを培養し複数が根付いたものから貴重な一本ずつを間引いて土岐尋常小学校へ贈ったものと思われます。いずれも珍しい桜ばかりでたいへん価値のあ

初代帝国ホテル（渡辺譲設計）
3階建、客室数約60。1890年（明治23年）竣工。1919年（大正8年）失火から全焼。

るものです。彼が贈ったこれらの桜はおそらく江戸時代末期の品種です。

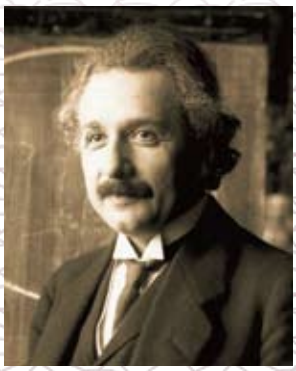
学は、それより以前、大正二年（一九一三年）五月東京帝国大学教授として最上位の高等官一等に叙せられ、名を挙げていましたが、その原点となった土岐小学校時代を彼は忘れることなく、最も大切にしていた桜を贈ったのでした。

アインシュタイン博士の接待

大正十一年（一九二二年）秋、前年ノーベル物理学賞に輝いたアインシュタイン博士を帝国学士院が日本へ招待しました。この時の接待委員が物理学の長岡半太郎博士と学でした。この時、アインシュタイン博士夫妻を、学が園長を務める東京帝国大学理学部付属の小石川植物園に案内しています。

学は、留学で鍛えた流ちょうなドイツ語を使って、時折、冗談を交えながらアインシュタイン博士夫妻を案内しました。アインシュタイン博士も楽しいひと時を過ごすことができました。おそらく、植物園の一角に植えてある桜や花しょうぶも紹介したことでしょう。桜の開花の時期ではなかったので少し残念な気もします。

大正 11 年、来日中のアインシュタイン博士夫妻を小石川植物園で案内する三好博士。



アインシュタイン
(1879 年～ 1955 年)
ドイツ生まれの理論物理学者。

天然記念物保護にかけた後半生

大正十三年（一九二四年）四月、学は東京帝国大学教授を定年退職しました。大学を退職した後、しばらくの間大塚にある高等師範学校へ講師として行っていました。当時、学は六十四歳でした。同年十一月に名誉教授となり、天然記念物候補植物の調査と指定に専心するようになります。

学は教授時代の後半から死を迎えるまで、全力を傾注したのが天然記念物保存事業です。わが国でも明治の文明開化の流れに害され、江戸時代以前の昔から守られてきた巨樹、名木が刈り倒されるようになりました。これに警鐘を鳴らした最初が、学の明治三十九年（一九〇六年）の論説です。

この事業を確立するには法律の整備が必要でした。つまり、「天然紀念物保護法」の制定がなくてはなりませんでした。学は全力でこの運動を開始しました。まず動物学、地質鉱物学その他の人々と協力して運動を広げ、有識者の意識付けに努めました。

史跡名勝天然記念物保存に関わる建議案を学本人が執筆し、明治四十四年（一九一一年）三月十五日の第二十七回帝国議会に徳川頼倫侯爵が主な発議者として貴族院に提出され、三宅秀博士が趣旨説明し、すぐに可決しました。次いで衆議院でも可決される

三宅 秀（1848 年～ 1938 年）
日本の医師、洋学者、医学者、貴族院議員、東京大学で最初の医学博士。三宅家には、明智光秀あるいは弟の子孫であるという家伝がある。

ことになりました。

そして、この建議案が法案として貴族院へ提出されたのは大正八年（一九一九年）三月で、衆議院を通過し、同年四月十日保存法案公布、六月一日から施行されています。学が天然物保護を提唱してから十三年。目指す最大のハードルを越えることができました。

後日、学は昭和十一年（一九三六年）十一月十日の史跡名勝天然紀念物保存協会の創立二十五周年記念式典の講演で、建議案を提出した時のことを次のように述べています。

「明治四十三年の春ごろから…大学方面の同僚同学の諸氏先輩諸先生を歴訪して私の考えを述べましたところいずれも賛成され、殊に貴族院議員たる三宅秀博士は多大の同情を以て議会へ建議案の提出の手続きを取られることになりました。」

学は法律施行とともに「史跡名勝天然紀念物調査員」として植物の調査に当たり、昭和十一年（一九三六年）までに指定された史跡、名勝、天然記念物の合計一四三七件あまりを門弟と共に調査し、指定しています。この数はその時の天然記念物の七割近くで、自然保護の先駆者としての学の意気込みと、その実行力にはすばらしいものがありました。

学の天然記念物をはじめとする著書は数多くあります。全印刷ページの合計は二万ページを超え、著書は七十冊を超えます。

三好学博士の終焉

学は昭和十四年（一九三九年）四月十八日から二十三日まで京都の山桜を調査。二十八日、山梨県八木沢村（現在の身延町）のイチョウの調査。続いて、五月一日からは仙台で紅桜の調査をしました。いずれも天然記念物への指定に関わる調査でした。

五月五日、帰京の翌日、日帰りで群馬県館林のツツジの指定調査に出かけた夜、風邪のため発熱をしました。急きょ、東京四谷の慶応病院に入院しましたが、同月十一日朝、帰らぬ人となりました。七十七歳でした。まさに天然記念物の保存に命をかけた人でした。

三好學博士重態　植物學の泰斗三好學博士（七七）は六日群馬縣館林町に鷹觀の調査に行つて本郷區駒込西片町一〇の自宅に歸宅後急性肺炎となり七日慶應病院に入院、内科部長西野博士等の手當を受けてゐるが重態である

三好學博士　東大名譽教授理學博士三好學氏は既報の如く群馬縣の鷹觀調査から歸京後急性肺炎となり七日以來慶應病院に入院中であつたが十一日午前六時五十分死去した、享年七十九、告別式は十四日午後二時から青山齋場で執行

博士は岐阜岩村藩士三好友衛氏の二男に生れ東大で植物學講座を擔當、大正九年帝國學士院會員、同十一年植物園長、大正十三年退官、植物に捧げつくした一生であつた、博士の研究は外國でも特別な權威を以て迎へられベルリンドイツ植物學會名譽會員、ドイツ樹木學會名譽會員、ウイン動植物學會客員、ウイン學士院の客員等に推薦され急逝は痛惜されてゐる

（東京朝日新聞、昭和14年5月10日）

（東京朝日新聞、昭和14年5月12日）［下も同じ］

三好学博士の重態と死亡を知らせる新聞記事。（東京朝日新聞）

第三章　偉業を支えた力

三好学博士は、数多くの功績を残しましたが、このような功績を残すことができた力は何か。それらの偉業を支えた力は何か。それを知ることは、博士から私たちが学ぶべき指針でもあります。博士の生きざまをたどっていくとその力が自然と見えてきます。

Ⅰ　克明な記録力

三好博士は、少年のころより、日ごろの学習記録を一冊にまとめて残す習慣を身に付けています。師範学校時代の授業内容については『師範学校学室講義』として残しています。また、少年期より作詩を重ねてきたものについては、きれいな毛筆で綴った『竹雨桜詩集』があります。さらに、土岐小学校の訓導時代には、日々の授業の様子を『授業日誌』という冊子にまとめ上げました。植物学の研究についても、その都度、克明な研究結果をまとめ、それをわかりやすく冊子に仕上げています。

生涯にわたって書き続けた著作物は、「重ねると自分の身長を越える」と三好学博士自身が言っています。このような膨大で貴重な著作物を残せたのは、几帳面な整理力と

克明な記録力が備わっていたからです。

Ⅱ　たぐいまれな向上心

三好学博士は途中で植物学へ転向したものの当初は文学志望でした。土岐小学校の訓導の時期は、学校が休みの土曜日・日曜日は片道十里もある犬山まで通い、※漢籍と書道の勉強をしたほど向学心に燃えていました。十里といえば約四十キロメートルです。普通に歩いて十時間程度、途中の中山道は山あり谷ありの難コースです。普通日は、早朝から夜十時ころまで学校に勤務しながら、土曜日・日曜日は、犬山まで通って勉強したというのですから、文学を極めたいというその向上心は他人にはわからないほど強かったと思われます。

「若いころには特に文学に興味があって、土岐小学校の校長時代には毎週土曜日には頼山陽の門人で犬山藩の儒者であった村瀬太乙のもとに草履掛けで十里の道を歩いて通い、日曜日一日漢籍および書道の指導を受けて帰るのが常でした。」

と本人も日記に書いています。

文学で同じ時期に活躍した人として、医学の森鴎外（三好学博士と同年）、英文学の

※漢籍：漢文で書かれた書籍のこと。

夏目漱石（三好学博士より五歳年少）などがいます。三好学博士も植物学ではなく、文学の道へ進んでいたら、この二人に肩を並べる文学者になっていたのかもしれません。

Ⅲ より高い志

「志」といえば、岩村藩が生んだ佐藤一斎の著書に『言志四録』と呼ばれる四冊の有名な人生語録があります。「志を言う」という書名から、中身は志を高く持ち続け学ぶことが大切であることを示す語録も多く含まれています。三好学博士の書いた『授業日誌』の欄外に一斎の次の言葉が記されています。

「人各分有り。まさに足るを知るべし。ただ講学は則ち当に足らざるを知るべし。」（言志晩録202）

これは、「人それぞれに能力がありそれを知ることは大切である。しかし、勉学については、どこまでも限りがなく、勉学を続けることが大切である。」という意味です。この日の日誌にはガリレオの例を挙げながら、学問の世界は、解明するべきことがいっぱいあり、それを探究する志を持つことが大切であることを書いています。

三好学博士は、小学校の訓導時代に生徒に向かって、ことあるごとに志の大切さを説

いていました。

「凡そ事目的なくして行わるべからず。目的なきことは志の立たざるものにて、志の立たざるものは業遂になるべからざるなり。」

（事に取り組むときは、その目的が必要です。目的がなければ志が立ちません。志が立たなければ事を成し遂げることはできません。）

自分の人生において実際に志を最後まで貫いた三好学博士の言葉には、説得力がありました。

Ⅳ　あくなき探究心

「先生は常に積極的に新方面を開拓してみえました。第一に我が国に初めて植物生理学を入れ、第二にさらに植物生態学を起こされ、第三に新しく天然記念物保存事業のため尽力されました。」

と門下生の一人が言っています。まるで立ち止まることを知らない研究姿勢でした。

博士は研究人生を通じて、幾度となく植物の採集旅行に出かけています。駒ケ岳への旅行は一人で出かけ、山頂で泊まっています。まだ交通手段も未発達のこの時代に、こ

れほど頻繁に出かけるところは、博士のあくなき探究心の表れだとも言えます。

V 卓越した語学力

近代創世期に欧米から最先端の科学的知識を日本に導入するには、その国々の言語を自由に操ることが必要です。今と違って、辞書も不十分な時代に語学を身に付けることは極めて困難なことであったでしょう。

三好学博士は、すでに幼少のころから岩村藩にて英語に触れていました。そして、東京大学予備門の受験勉強では、勉強した内容を英語でまとめ冊子をつくっています。

大学院時代にドイツへ留学した時は、もちろんドイツ語が必要でした。ドイツでの研究論文もドイツ語で書いています。

このように三好学博士は、日本語のみならず、英語、ドイツ語にも優れていました。

「門下生が研究結果について報告に行くと、新事実について我が事のように喜ばれました。若い門下生の論文は大変速く検閲され、さらに、外国文については、外国人の語法上の校正を受けて発表するように大事をとられました。」

この思い出話からもうかがえますが、三好学博士は、語学をとても大切にしていまし

たし、その勉強にも力を入れ、人一倍の語学力を身に付けていました。

Ⅵ　空論より実学

一方で、三好学博士の探究心、学問観は実際の生活に役立つ実学の必要性を重視しています。それは、実際に現地に出向き、自分の足で山野を歩き回り、自分の目で見て、自分の手で採集した標本をもとに研究をすすめていった姿がそのことを示しています。

また、小学校の訓導時代は、教科書を座学で行うばかりでなく、農学や新聞教材を用いて実際の生活に役立つ授業の工夫もしています。

「先生は門下生の指導に当たって常に言われたことは、『若いころは、はじめから大きな研究をやろうとしてはいけない。小さな、そして確実にできる見込みのある実物をつかみ着実に研究して一つ一つまとめて進まなければなりません。』と理論的などという足が地につかない空想的な研究に流れるのを厳しく戒めてみえました。それで、学生の卒業論文の題目も具体的な『物』の実在するものを与えられました。」

空論より実学を重んずる姿勢は、佐藤一斎にもみられます。また、下田歌子の創立した実践女学校（現在の実践女子学園）の名称にも表れています。これは岩村藩の学風で

もあるように思えます。

Ⅶ 勤勉で温和で親孝行

三好学博士の人柄についてのエピソードなどはほとんど記録にありませんが、門下生のいくつかの思い出話が伝わっています。

「先生は背が低く丸顔で、円満そのもののにこやかな態度で人に接せられ、先生の怒ったり憤慨されたりしたところを見たことがありません。これは先生の天性であったらしく、みんなの中でも年上の感じがしました。また、先生が物事を否定されるときは『そんなことは穏当ではありません。』と言われる癖がありましたが、これも先生の人格の円満さを語っているのだといえます。」

「先生は、一生を通じて極めて健康でした。若いころ小学校の校長先生を務められたときは、朝早く登校して夜十時ころも学校で執務をされていたという熱心さと健康ぶりでした。」

「先生は、公生活と私生活を厳しく分けてみえました。大学教授としての仕事は必ず大学で行い門下生にもご家庭の様子はほとんど話されませんでした。ただ、母親のこと

服部廣太郎（1875年～1965年）
日本の生物学者、東京帝国大学講師。菌類を専門とした。昭和天皇の生物学の師。

は時折漏らされることがあって、その親孝行ぶりが垣間見られました。」

大学院で三好学博士に師事した服部廣太郎は「三好先生の思い出」の中で次のように述べています。

「学生として、助手として三好先生に教えをいただく機会も多かったです。先生は極めて真摯な方で学問上の指導をいい加減にすることは少しもありませんでした。さらに、先生からいろいろな用務を申し付けられましたが、消耗品の出納でも保管でもすべて目を通され、決して粗略にされませんでした。万事先生の謹直潔白の性格から出たやり方でした。長い間先生に師事しましたが、一回も先生の冗談を聞いたことはありませんでした。したがって、幾分近づき難い趣があったともいえます。」

これらの思い出話から、三好学博士の勤勉さや温和さ、そして親孝行であることなどを感じ取ることができます。

Ⅷ　義理堅く人情深い

三好学博士の孫にあたる安藤裕氏（筑波大学名誉教授）の思い出に次のような話があります。

「母の実家に行くと、祖父はいつも母屋とは別の西洋館で書き物をしており、それが、窓越しに見えたものでした。この二階建ての西洋館は、下が書斎、上が祖父の寝室（和室）で、天気がよいと富士山がみえました。広い書斎は書物や資料で埋めつくされ、書斎の脇に薄暗い書庫がありました。

祖父は、小柄でしたが、姿勢がよくがっちりした体をしていました。寡黙で近寄りがたい雰囲気の人でしたが、私たち孫が行くと『よく来たな』と言って足の甲の上に乗せ長い廊下を歩いたり、郷里の岩村の話だそうだが、げんご坂をやかんが転がってきたら狸だったという話をしてくれたりしました。」

外見は近寄りがたい雰囲気のあった三好学博士ですが、家庭では孫や家族に対して温かい存在でした。

また、お世話になった叔父さんには事あるごとに手紙を出しています。伯母さんには、借金をしてまでお墓を建ててあげています。また、教えを受けた師に対しては、お墓参りを欠かしたことがありません。三好学博士は、義理堅く人情味のある人でもありました。

また、「研究は一人ではできません。みんなの協力が必要です。」と郷里の岩邑小学校

での講演の時に述べていますが、博士の数々の功績は、多くの協力者のおかげでもあります。これは、博士のこうした人柄が成しえたものだともいえます。

Ⅸ　牧野富太郎博士の追悼文

前述した博士の身近な人々の思い出話を総合してみると、博士は研究や教育に対しては、真面目でありすぎるため、一見して近寄りがたい雰囲気をもっていたと思われます。また、とても義理堅い人でもありました。それは、叔父への手紙や、お世話になった人々への対応の仕方を見ればわかります。外見上、堅くて近寄りがたい雰囲気はありますが、私生活では、孫をかわいがり、冗談を言ったりして、情け深い人間味あふれる面もありました。

博士と同時期に植物学者として活躍した牧野富太郎博士の追悼文を紹介します。

この文は、三好学博士が亡くなった翌日（昭和十四年五月十二日）東京朝日新聞に載りました。この追悼文は、短いながらも三好学博士の植物学者としての功績や博士の性格、生い立ちなどを端的に伝えています。

（追悼文）

「北海道大学の宮部金吾君と三好學君と私が、いずれも歳が一つずつ違って、日本植物学会の三長老ということになっていましたが、私より一つ上の三好君が一番先に逝くとは思いませんでした。従来アメリカ風だった東京大学の植物教室にドイツ風の学風をもたらしたのは三好君がドイツ留学から帰ってきてからのことで、日本における植物生理学の開祖です。

もともと彼の専門は地衣植物であって卒業論文も地衣類の研究であったがドイツ留学後、これを捨てて生理学の方に移りました。この方面の門下生には柴田桂太博士をはじめ多数の俊才がいます。

「桜」と「花菖蒲」の研究に没頭するようになったのは定年で東京大学をやめられる前ぐらいのころからで、三好博士といえば「桜」を連想するくらい有名でした。

「桜」に関しては、多数の論文を発表されておりました。また、多数の文献も集めてみえました。

三好君の大きな功績の一つは、文部省に建議して日本に天然記念物制度を作ったことです。日本の「さくら」の古木、名木をはじめとして多数の植物が、ほとんど博士の手

により天然記念物に指定され、保護されています。今度の博士の病気も天然物調査のため館林の「つつじ」を見にいかれた帰途、風邪を引かれたのが原因だそうですが、晩年はこの方面に全力をそそがれていました。

三好君は、非常に頭のよい秀才でその生地美濃国岩村にいたころは有名な漢学者佐藤一斎の学統を継ぐ学者になろうとした事があるそうで、漢学の素養があったからこそ文章が非常にうまく恐らく日本の植物学者として最も多くの著書を残されていると思います。

若いころから、他人との交流をあまり望まず、学生時代から孤独を愛されたようですから、いわゆる逸話というようなものはほとんどありません。

三好君が一番愛した「さくら」は散りましたが、「はなしょうぶ」の咲くのを待たずして死なれたのはまことに残念です。」

（以下の資料はまんが『桜の博士　三好学物語』より引用したものです。）

資料　自然はなぜ破壊されるのか

～三好学博士著『天然記念物』より～

三好学博士は、天然記念物保存について、どのようなことを訴えかけてきたのでしょうか。大正四年（一九一五年）に出版された『天然記念物』の第一章、第十三章には、現在にも通じる、自然保護や環境破壊、景観保存についての考え方がわかりやすく述べられていますので紹介します。小中学生のみなさんにも読みやすくするために、表現、表記、句読点は一部変え、見出しをつけました。

Ⅰ　日本の風景が壊されている

日本は気候がよく、雨が多く、土地が肥え、草木の発生が盛んで、山水の景色に富み、また、動物、植物、鉱物の種類も多いことで世界にも名高い国です。

このように日本固有の天然物は、太古（大昔）から伝わってきたもので、昔はいたるところに天然にはえた林、美しい原野、珍しい石、清い流れなどが見られましたが、世

の中が開けるに従い、自然に趣（様子）が変わって、森林は破壊され、原野は開こんされ、岩石は壊され清い流れはなくなり、そのあとに町や田畑や工場などができました。

江戸時代には、各地にまだ古代の樹林原野がありましたが、今では、尺寸地（せまい土地）も利用されていて、天然林、天然原野は、日に日に消滅してゆきます。もしこのままで（破壊が）進んだら、わが国固有の天然記念物やいい風景もついには見られなくなるかもしれません。

Ⅱ　破壊の原因①　価値を知らない

天然記念物が壊される原因はいろいろあります。ここに主なものをあげてみます。

第一は、天然記念物そのものの価値を知らないことから起こることです。

誰でも、天然記念物の中に、土地の風景、または学問上、その他の記念として大切なものがあることを知っているときは、むやみに破壊することはしませんが、このような観念がないため、知らず知らず貴重な天然物を壊してしまうことが行われています。

これは、別に悪意があるわけではありません。無教育の結果（知らない結果）として起こるので、惜しむべきことです。だから、天然物の価値があることを明らかにするこ

とが大切です。天然物の中には、国有の物もあり、共有の物もあり、私有の物もあって、持ち主はさまざまですが、すべての持ち主が、天然物の中の価値があるものについて、日ごろから注意をはらうことが必要です。

Ⅲ　破壊の原因②　たくさん採集し、商品化する

第二の原因は、天然物利用の上から、たくさん採集し商品とすることにあります。

例えば、木材として用いるため美しい天然林を打ち払い、またはいろいろな工業に提供するために立派な樹木・美しい草花などを伐採したり、または、植木・盆栽として、たくさんの草木を採ることです。

高山植物のような珍しくて美しい種類を商品として根のままたくさん採り去るために、ついにはその種類を絶やすことになります。薬用植物（薬草）の採集も同じで、野外に生えているこれらの植物をたくさん採るために、ついにはその種類が見られなくなります。

Ⅳ　破壊の原因③　開拓や建設工事

第三の原因は最も大切なことで、土地を開拓したり、鉄道や道路を造ったり、市街地を造成したりすることによって起こることです。

このために、昔から残ってきた森林が打ち払われ、原野が開拓されて、その趣（様子）が全く変わり、また、山を壊し、沼を埋め、地勢上の変化を起こすことになります。その結果として、今まで風景が美しい土地で、静かで奥深いことで名高かったところがなくなってしまい、ありふれてつまらない景色になってしまいます。

もちろん、開拓などの事業は国の発展にともなうもので、やむをえないことではありますが、ただ無意味に開拓を進めていって、天然の趣（様子）を保存する上になんら考えもない仕事をしていると、ついには取り返しのつかない殺風景な結果になります。この点は天然物の破壊の中でもっとも大切な原因で、今日でもすでにその実例がたいへん多くあります。将来はますます多くなるでしょう。

Ⅴ　破壊の原因④　工業の進歩

第四の原因として、工業の進歩として工場が設置され、水力電気事業などが多く行わ

れることから、湖、川、あるいは瀑布（滝）などの水をおびただしく利用することになり、水源を枯らすおそれがあるだけでなく、そのために周囲の森林の発生を害することが少なくありません。

それのみならず工場から出るばい煙、有毒ガス、たとえば亜硫酸ガスなどのために、付近の草木を枯らし、衛生上も有害です。また、工場から排出する有毒物が川に流れ込み、川の中の魚類はもちろん、付近の田んぼの作物にまで害をおよぼすことがあります。このような被害の実例は今までに少なくありません。

Ⅵ　破壊の原因⑤　火災

第五の原因は、火災です。これには雷火（落雷による出火）もありますが、しかし多くは野火（野山の枯れ草を焼く火）のために森林が焼かれることです。北海道の原野や森林では、広大な面積がこのような野火の災いをこうむることがあります。外国にも実例は多いですが、特にアメリカ合衆国の森林などは、このために大損害をこうむっています。私が昨年（一九一四年）三月下旬、カリフォルニア地方を旅行したとき、サンフランシスコからサンタクルーズの海岸沿いの山中にあるレッドウッドの大森林が山火

事になって、煙は天をこがし、すさまじいありさまでした。

このように、いろいろな原因で天然物は壊されなくなっていきます。天然の原因からきたものはしかたがありませんが、人間の行為によって起こることは、適当な方法で制限しなければなりません。

Ⅶ　ふるさとを守ることの大切さ

郷土保護（ふるさとを守る）とは、近年、海外諸国、特にドイツで唱えることで、大きくいえば一国、小さく言えば一州、一郡、一村などの土地の保護です。ここでいう「保護」は、いわゆる軍備によって外敵の侵入を防ぐことではなく、その土地固有の特徴が滅びることを防ぐことです。

一つの土地には、おのずから特徴があります。

まず地勢からいえば、山岳、丘陵、湖、川、原野など、古代からその土地の特徴を表しているものがあり、その上に森林などの草木、いろいろな鳥や動物、虫や魚、化石、鉱物など、その土地固有の天然物としてみるべきものがあります。

また、その土地には、昔から歴史をはじめ、風俗、言語にいたるまで、それぞれの

特徴があります。これらの特徴は、一口でいえば「風景」「天然物」「歴史」の三つになりますが、細かく分けると、たくさんの項目があります。

一つの郷土としての特徴を表すためには、その歴史、名勝、天然物の保存を行い、その特徴が消滅しないようにしなければなりません。しかし、世の中の変化に従い、名勝・旧跡もしだいにわからなくなり、人に忘れられ、また固有の天然物も壊され、あとかたもなく消えてしまい、その郷土の特徴がなくなってしまいます。

これを防ぐために、近世になってヨーロッパでは郷土保護の事業が盛んになってきました。その事業は、まず、その土地の特徴である史跡、名勝、天然物についての調査をして、その結果を報告し、さらにくわしい郷土誌の編さんを行い、また、一方では郷土記念の材料を集めて陳列する郷土博物館を作り、土地の人々にふるさとの特徴を知らせます。その他、土地の学校では、中学校、小学校で郷土誌に関係のあることを教え、いわゆる郷土学の講習をおこたりません。

外国では、各地で郷土学ができ、また郷土博物館も設けています。大きい町の博物館には世界的な材料が集めてありますが、その一部には、郷土の歴史、天然物に関する物品が陳列されています。また、郷土誌も、簡単なものからよりくわしいものまで著され

ています。近年、フランスの各州では、くわしい郷土誌の編さんが行われて、すでに大分できました。二冊、三冊くらいの大本で、郷土に関する一切の事柄を分類的に記してあります。歴史、地理、政治、経済などの部分と動植物、地質、物産などに関する部分を分けて立派に編さんされています。

このような郷土誌は、その郷土の利益となるもので、もとより局部的（地域的なもの）です。しかし、このような記録が全国を通してできると、それによってその国一般のくわしい記録ができあがることになります。

わが国では、江戸時代には『名所図絵』や各藩の郷土的書類があって、名勝、伝記、歴史、産物などに関する事がらはかなり詳しく書いてありますが、博物学やその他の科学についてはかなりおおざっぱで、不正確で、決して完全な郷土誌にはなっていません。これから郷土誌を編さんする場合は、決して一方の材料にかたよることなく、各方面に対して一様にくわしく、かつ正確に書かなければなりません。

……（中略）……

郷土保護の考えは、わが国にも昔からあり、今日では小学校などでも郷土学を教えていますが、たんに学校ばかりでなく、地方の公共団体において郷土保護のために尽力し

なければなりません。市町村の公職にある人々、また土地の名望家、有志家は、みんなこの考えで郷土の歴史を明らかにし、名勝、天然物を保護し、その土地の特徴を表す天然記念物および人造記念物を永遠に残す方法を講じ、一方で郷土愛護心の涵養をはかり、他方においては、これらの特徴を世に紹介して、その土地の誇りとすることに努めなければなりません。

企画・監修　三好学生誕百五十年記事業実行委員会

二〇一二年三月二十三日発行

三好学博士生誕150年記念事業

（三好学生誕150年記念事業実行委員会作成の資料より引用しました）

平成24年は、サクラとハナショウブの博士として知られる三好学博士が生まれてから150年目の記念の年でした。岩村町出身で若いころから勉学に励んだ博士は、日本の近代植物学の基礎をつくり、天然記念物保護に力を注ぎました。恵那市では、三好学博士生誕150年記念事業実行委員会とともに、博士の生涯とその功績を紹介し、わがまちの誇る偉人としてたたえる記念事業を行いました。

記念事業

Ⅰ　記念フェスティバル（平成24年1月15日）

Ⅱ　ゆかりの品を展示

Ⅲ　子ども植物画巡回展

150周年を記念して寄贈された三好学の銅像と碑
（岩村城址公園）

150周年を記念して創られた記念本
（企画・監修　150年記念事業実行委員会）

「三好学博士の信念」をしっかりと受け止め明日へつなげよう

私たちの郷土・恵那市の生んだ先人・三好学博士は、「環境があってそこに人間が存在する」という信念のもと、国際的に活躍した世界の植物学者です。幼少のころに育った岩村の自然が博士の志と学びの礎となり、その後、サクラやハナショウブの研究を通じて、当時の日本人の誰よりも自然の大切さを唱え、植物や自然の景観の保護に力を尽くしました。

博士が生まれて150年という記念の年、私たちはサクラの植樹や植物画コンクール、清掃・美化活動など、さまざまな催しを通じて、博士が守ろうとした自然の素晴らしさ、大切さを「見て、読んで、知って」学んできました。

今、私たちの周りでは、干ばつや豪雨などの異常気象や、海面の水位が上がるなど地球温暖化によるさまざまな環境の変化が起きています。私たち人間の活動が、便利さ、快適さを求めて拡大していくことによって私たち自身が地球を傷つけているのです。

このような中、明治時代の産業発展の陰で、多くの貴重な自然がおしげもなく破壊されていくことを心配し、その保護を訴えた博士の行動から学ぶことはたくさんあるのではないでしょうか。

「環境があってそこに人間が存在する」という博士の信念をしっかりと受け止め、私たちが生かされている美しい自然を守り続け、みんなで明日へとつなげていきましょう。

平成二十四年一月十五日　　三好学博士生誕150年記念事業実行委員会

故郷恵那の桜

大井：恵那峡の桜

笠置（かさぎ）：蘇原神社（そはらじんじゃ）の桜

東野（ひがしの）：宗久寺（そうきゅうじ）の桜

大井（おおい）：土々ヶ根（どどがね）のしだれ桜

笠置（かさぎ）：笠置峡（かさぎきょう）の桜

故郷恵那の桜

岩村：乗政寺山　大名桜

東野：阿木川ダムの桜

岩村：吉田川経塚の枝垂れ桜

岩村：富田杭打の桜（阿弥陀堂の桜）

山岡：釜屋の枝垂れ桜

山岡：馬場山田の桜

故郷恵那の桜

上矢作：新田の桜

明智：八斗蒔の彼岸桜（遠山桜）

串原：奥矢作湖畔の桜

串原：ひよもの桜

大井：恵那峡さざなみ公園の桜

三好学博士の故郷 岩村

城下町：岩村本通り

岩村城跡：六段壁のみごとな石垣。

藩主邸太鼓櫓

下田歌子勉学所

妙法寺：岩村三好家の菩提寺。

ナマコ壁

加納家：火縄銃や槍を製造。

勝川家：幕末の豪商。

木村家：町家の形式が残る。

土佐屋：江戸時代の染物屋。

岩村の街並み。

岩村富田地区：日本一の農村景観。

岩村城跡の麓にある三好学博士の銅像。

銅像の横にある花菖蒲園。

あとがき

三好学博士が生きた幕末から昭和初期にかけての時代は、まさに近代日本の創世期で、激動の時代でした。誰もが社会の大きな変化の激流に流され人生を翻弄された時代でした。その激動の時代を生き抜いた三好学博士の生涯を振り返り、その生きざまを見れば、博士がいかにその時代を積極的に生きたかわかります。

博士は早くに父を失い、家計を助けるため仕方なく家を出なければなりませんでした。文学者になりたいという強い願いと才能がありながら、義務と義理を果たすために不本意ながら断念しなければなりませんでした。博士は人生の中で、何度も大きな壁にぶつかり、迷う時期がありました。そのたびに持ち前の力で乗り越え、自らの運命を切り拓いて行きました。そして、念願の文学への道が拓けたとき、あえてそれを断念し植物学へ大きな転換をしたのでした。それは、時代の流れを読み、日本の将来を思った結果であると思います。この時代を生きた博士は、時代の流れに流されたのではなく、まさにその流れを力強く作った人物なのです。

博士の生きた時代と比べて今の時代はどうでしょうか。確かに生活環境は便利になったといえるでしょう。科学技術も世界をリードするほどになっています。しかし、地球温暖化やプラス

チックごみなど博士が心配していた環境問題はさらに大きな問題となっています。また、人間関係は希薄になり、明治初期の近代日本の創世期より住みにくい社会になっているかもしれません。少子高齢化の時代を迎えてすべての分野で今後先細りの傾向にあります。こんな時代ですので、今後何が起こるか分かりません。社会や生活環境がどのように変わってくるかわかりません。ひょっとして明治の激動の時代より、混とんとして不安の多い時代かもしれません。このような社会の中で、子どもたちは育ち、そして、将来家族や社会を支えていく存在にならなければなりません。

激動の時代を生き抜いた郷土の先人三好学博士の生きざまから学ぶべきことは多くあります。

本書が次代を担う子どもたちに指針を与える一冊になることを願っています。

最後に、本書を作成するにあたり、岐阜大学准教授　石田 仁様、ＰＨＰ総研　寺田昭一様をはじめ多くの方々のご支援をいただきました。心より感謝申し上げます。

三好学博士略年譜

年号	西暦	年齢	出来事	世の中の動き
文久2	1862	0	一月四日（旧暦では文久元年十二月五日）、江戸の岩村藩上屋敷で生まれる。	
明治元	1868	6	家族で岩村（現在の岐阜県恵那市岩村町）に移り、城下の熊洞に住む。	1867年（慶応3年）大政奉還
明治5	1872	10	父・友衛が急死。熊洞から殿町に転居する。	1872年（明治5年）新橋・横浜に鉄道開通
明治6	1873	11	福井の三国港（今の福井県坂井市）の母方の伯父（中嶋性善）の家に預けられ、修齋小学校に入学。	
明治9	1876	14	小学校を卒業し、福井小学授業法伝習所に入所。伯父の家を離れ寄宿舎に入る。	
明治10	1877	15	石川県第三師範学校へ編入学。友人・教師と白山登山。	1877年（明治10年）西南戦争
明治11	1878	16	師範学校を卒業し、岩村に帰る。	
明治12	1879	17	岐阜県訓導登用試験に合格し、土岐小学校（今の瑞浪市立土岐小学校）の首席訓導兼校長となる。	1879年（明治12年）エジソン、白熱電球を発明
明治13	1880	18	休日には片道四十キロメートルを歩いて犬山に通い、漢学者の村瀬太乙に学ぶ。	

年号	西暦	年齢	出来事	世の中の動き
明治14	1881	19	土岐小学校を退職し岩村に帰る。	
明治15	1882	20	東京に行き、母の実家に住みながら受験勉強をして、東京大学予備門にトップで合格する。	
明治17	1884	22	岩村に帰省した帰りに箱根で、東京大学の矢田部良吉教授と出会い、植物学への関心をいだく。	
明治18	1885	23	東京大学予備門を卒業し、東京大学理学部生物学科に入学する。	1885年（明治18年）伊藤博文、初代総理大臣
明治19	1886	24	岩村で独り住まいの母とよを東京に呼び寄せる。単独で木曽駒ケ岳を登山し、日本最初の高山植物帯研究を行う。	
明治21	1888	26	『植物自然分科一覧表』を丸善商社書店より出版。	
明治22	1889	27	大学を卒業し、大学院へ進学。御嶽山植物採集の帰途、岩村小学校で講演を行う。	1889年（明治22年）大日本帝国憲法公布
明治24	1891	29	国の留学生としてドイツ留学を命ぜられる。	
明治26	1893	31	ドイツで陸軍大尉大島健一（岩村町出身）と会う。	1894年（明治27年）日清戦争（～1895）
明治28	1895	33	ドイツ留学を終え帰国。東京大学教授となる。理学博士の学位を受ける。「生態学」という言葉を日本で初めて使用。矢野ミツと結婚。	

年号	西暦	年齢	出来事	世の中の動き
明治32	1899	37	『植物学講義』を出版。昭和6年の『最新植物学』が出版されるまで、日本の標準的な植物学書になる。	
明治35	1902	40	『植物生態美観』で「景観」という言葉を初めて使用。	1902年（明治35年）日英同盟締結
明治36	1903	41	東京の荒川堤に初めて桜を見に訪れ、船津静作と出会い、「桜の変異」についての研究を開始。	
明治38	1905	43	『日本植物景観』で小金井の山桜を初めて紹介。	1904年（明治37年）日露戦争（～1905） 1905年（明治38年）アインシュタイン「特殊相対性理論」発表
明治39	1906	44	東京植物学会会長に就任。「天然記念物の保存の必要性」の世論喚起の先頭に立つ。	
明治41	1908	46	「花しょうぶの変異」についての研究をはじめる。	
明治43	1910	48	天然記念物の保存についての提議を行い、制度の実現と指定対象の選定に努力。自然保護の先駆けとなる。	
明治44	1911	49	史跡名勝天然記念物保存協会より、貴族院に「史跡及天然記念物保存に関する建議書」を提出。	
明治45 大正元	1912	50	ワシントンに桜が贈られる。品種選定に尽力。母とよが亡くなる。	

年号	西暦	年齢	出来事	世の中の動き
大正2	1913	51	欧米学術視察（シベリアを経て、スカンジナビア、ドイツ、オーストリア）。ベルリンで野口英世と出会う。	
大正3	1914	52	欧米学術視察（イタリア、イギリス、アメリカ、フロリダ、アリゾナ、ハワイ）。米国名勝史跡保存協会名誉会員となる。	1914年（大正3年）第一次世界大戦（～1918）
大正6	1917	55	勲二等瑞宝章受章。	1917年（大正6年）ロシア革命
大正7	1918	56	『人生植物学』を出版。	
大正8	1919	57	「史跡名勝天然記念物保存法」が公布され、史跡名勝天然記念物調査員となる。	1919年（大正8年）ベルサイユ条約締結
大正9	1920	58	帝国学士院会員となる。	
大正11	1922	60	東京大学附属小石川植物園長に就任。アインシュタイン博士の接待委員を務める。	1922年（大正11年）ワシントン軍縮会議
大正13	1924	62	東京大学教授、小石川植物園長を定年退官。名誉教授となる。	1923年（大正12年）関東大震災
昭和2	1927	65	アメリカ政府の招待で、ハワイ天然記念物保存会議に出席。	1927年（昭和2年）金融恐慌
昭和4	1929	67	第四回太平洋学術会議に出席（ジャワ島）、植物園視察、クラカタウ火山調査を行う。	

年号	西暦	年齢	出来事	世の中の動き
昭和7	1932	70	東京植物学会を日本植物学会に改称。	1932年（昭和7年）満州国成立
昭和11	1936	74	日本植物学会会長を辞任し、名誉会長となる。	
昭和14	1939	77	五月十一日、急性肺炎で、この世を去る。	1939年（昭和14年）ヨーロッパで第二次世界大戦勃発（～1945）

主な参考文献

『桜ノ博士　三好学物語』　吉田健二 著（2012 年　株式会社 PHP 研究所）

『植物学者　三好學（一）～（四）』　安藤　裕 著
「青淵」618 号～ 621 号（2000.9 ～ 2000.12）連載（岐阜県図書館蔵）

『世界の植物学者　三好學博士』　樹神　弘 著（岐阜県恵那郡岩村町　教育委員会）

『評伝　三好学　日本近代植物学の開拓者』　酒井敏雄 著（1998 年　八坂書房）

『植物生態美観　新版』　三好　學 著（2011 年　富山房企画）

この本をつくった人々

編著：三宅勝義（恵那市教育委員会　学習コーディネーター・NPO 法人 いわむら一斎塾　理事）

監修：石田　仁（岐阜大学応用生物科学部　准教授　農学博士）

編集・協力：鈴木隆一（NPO 法人　いわむら一斎塾　理事長）

協力いただいた人・機関

岩村歴史資料館

PHP 総研　寺田昭一

片山隆雄

恵那市ふるさと学習読本　vol.6　ふるさと人物編❸

日本の近代植物学の開祖　自然保護の先駆者

三好学先生の生き方・考え方

発行日／ 2020 年 3 月 21 日
編著者／三宅勝義
発行者／恵那市教育委員会
〒 509-7292　岐阜県恵那市長島町 1 丁目 1-1
TEL：0573-26-2111

© 無断転載はご遠慮ください。

恵 那 市